



曉齋畫談外篇
卷之下



巨勢之

如空曉齋所藏硯

~~E~~
156
4

逍遙文庫
文庫 6
1297
4



繪
7
4
止

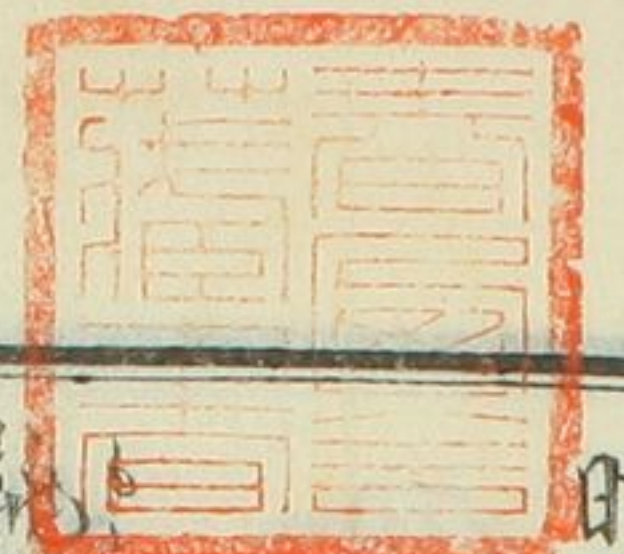
文庫6
1297
4

曉齋畫談外編卷之二

東京門人

梅亭

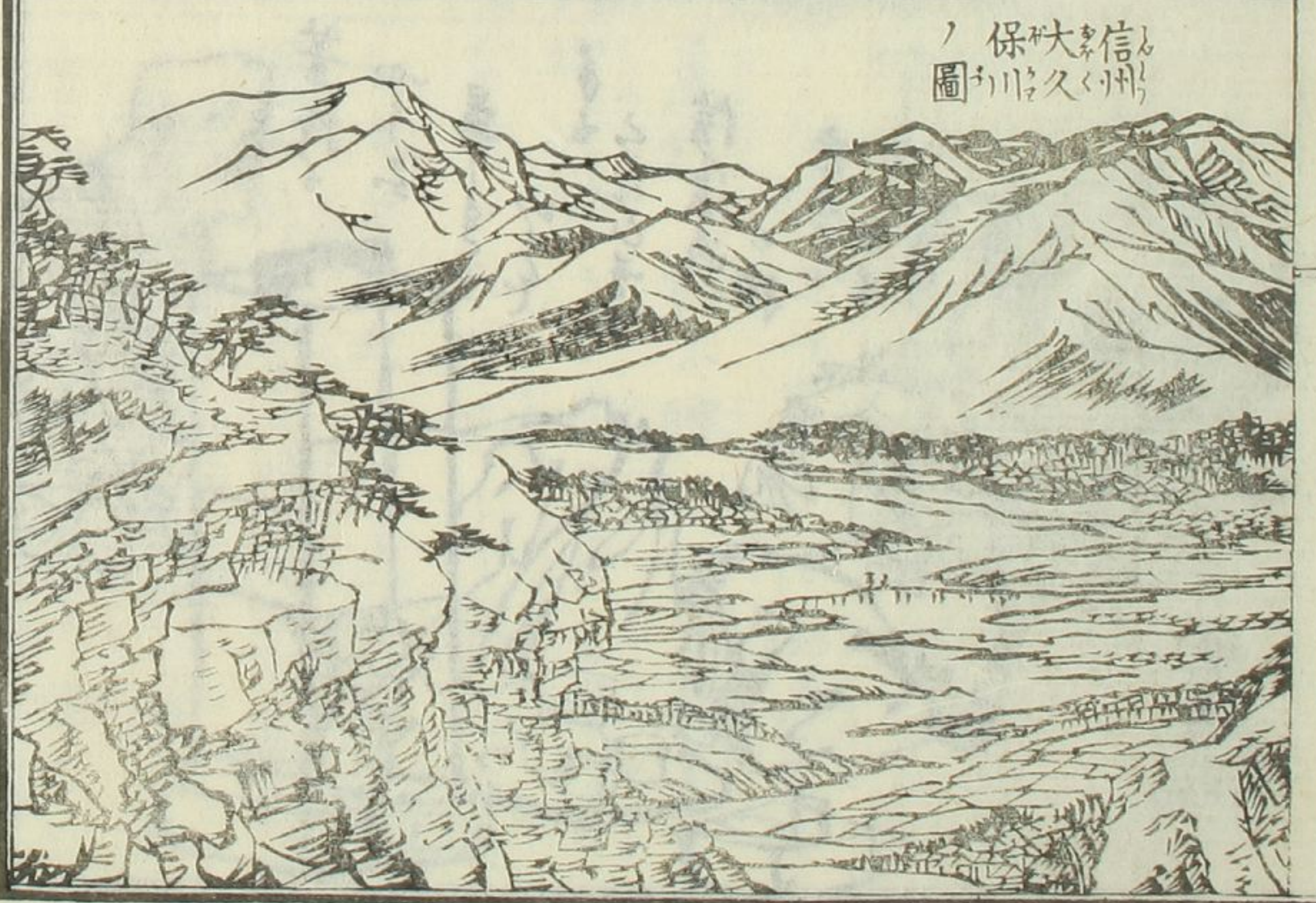
夢史編集



梅松花の色 咲少く程ふ萬新小涼如く風小春際伸る日柳
 を機と做し 雙鳥氏へ給てより 喚岩の信曉連舌の雪を粉激流
 岩小咽び瀑布玉と吐く深山の風景を祝し 看てを真と白
 得ん之を果す 信濃路みぬずと思ひ居し 故つてや彼処小
 遊人として 筆墨試の外 吏の格具を準備つ 同志の門身 杉本
 高小是と負せ 摩之年三月下旬 湯島の画屋を立わたり 兼
 通りと板橋許より 木下街迄 小向いしれども 武蔵國の
 是より 數回は来あり 且寝たる 珍しき風景も 子りせむ
 馬小舟 睡る なる 詔に 夢とて 腫まに 過き 弟三百め 不到り 其

早稲田大学図書館
011688993670

項上に 律元 立ちたる 岩石の 割
 りとら 如く 勢多 たるが 如き 有
 りて 冥ふ 寺 異の 形状 を 有した
 寺を 人 向 界 ありとも ありと
 男 小 程の 師め あり 故 別 園を
 一を 前 出せり 期て 信 皮 吹
 越 山 なる 峯 峻 崖 四面 園
 一々 庵 何を 廻 せし 如く あり 小 池
 々 何 せ 小 堂を 掃く 何 せ にも 思
 ひを 止ん 迷ひ せ ぬ 計り あり
 りし 先 万 字 頂の 眺望 を
 宮 生 あり 又 大 久 保 川 の 遠 景

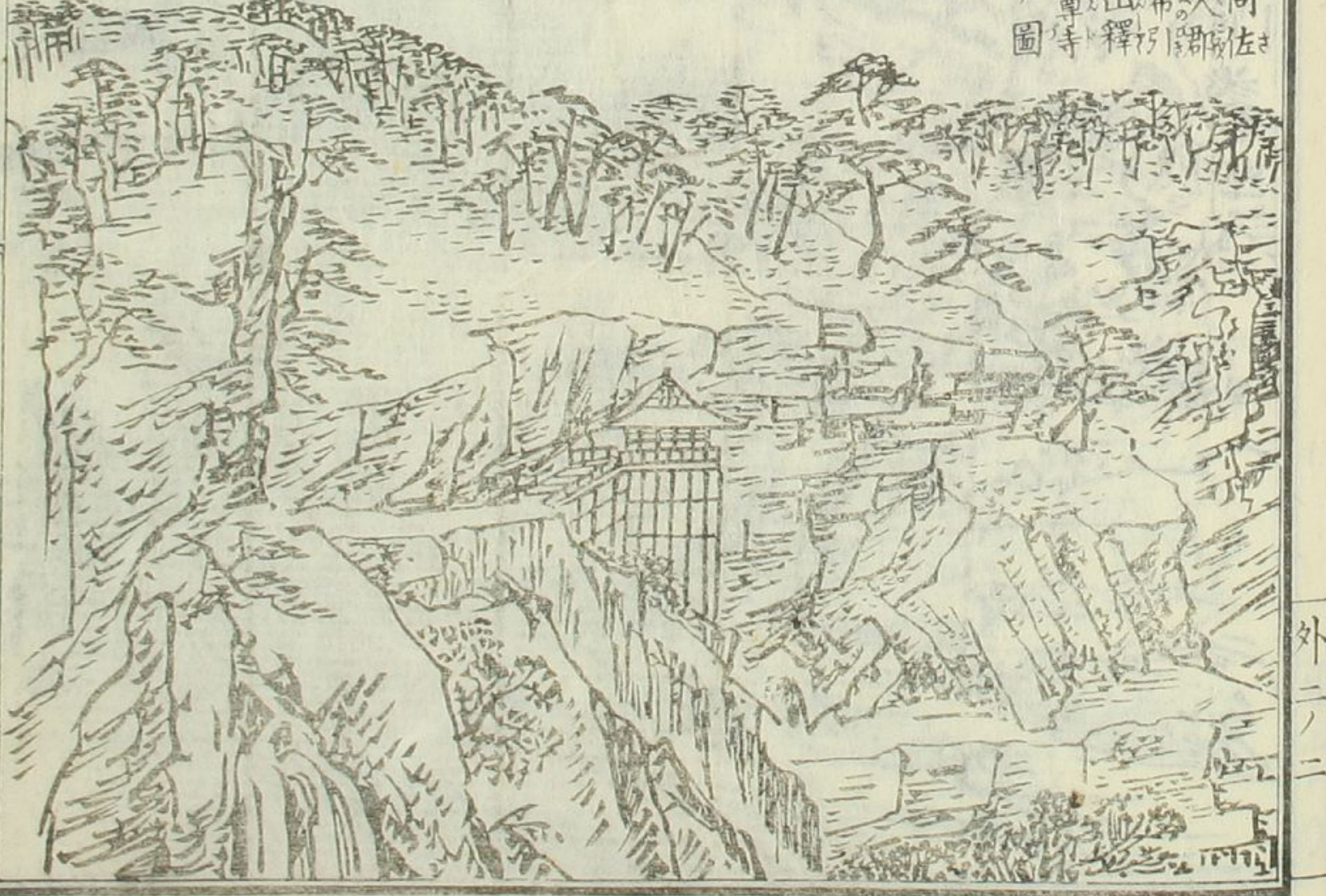


信州大久保川
圖

を 換り 程 同 國 佐 久 郡 あり 亦
 一の 美 観 と 称 せらる 市 町
 山 釋 尊 寺の 真 宗 を 守り 其 上
 りし 山 小 巖 小 溪 に 流 水 あり
 小 林 に 目 撃し 思ふ 所 あり 寺
 小 任 せり 矣 猶 掃 け 掃 け たる
 ども 掃 掃 あり せ 殿 なる 條 あり
 省 せり 哉 せん

○ 曉 高 氏 松 を 宮 生 せん せり
 一々 掃 掃 あり 掃 掃 あり

唯 高 氏 の 同 國 小 池 絶 跡 あり
 井 三 九 郎 と 人 あり 跡 あり



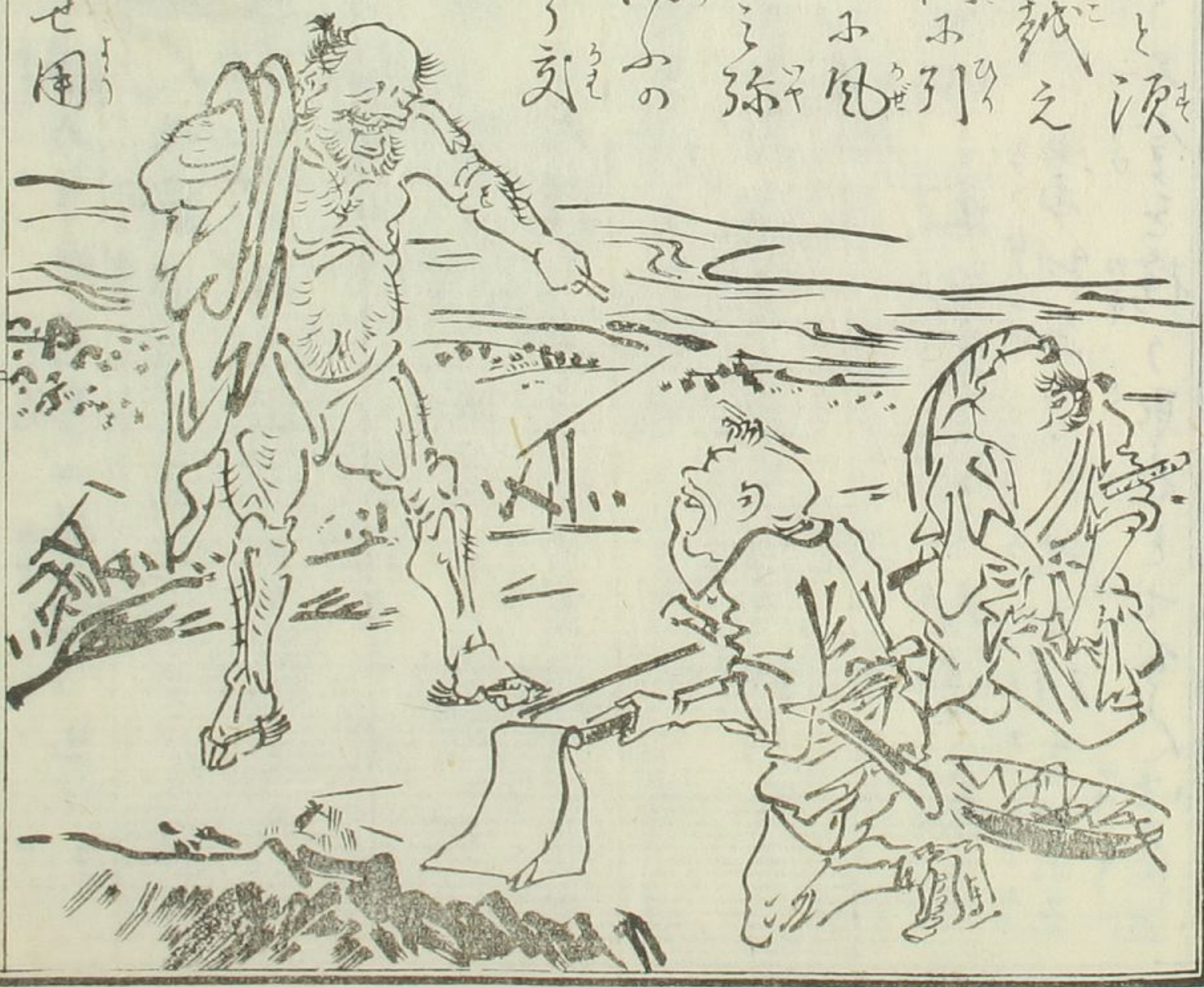
同 佐 久 郡 山 釋 尊 寺
圖

曉齋氏松寫生圖

惟中地取印



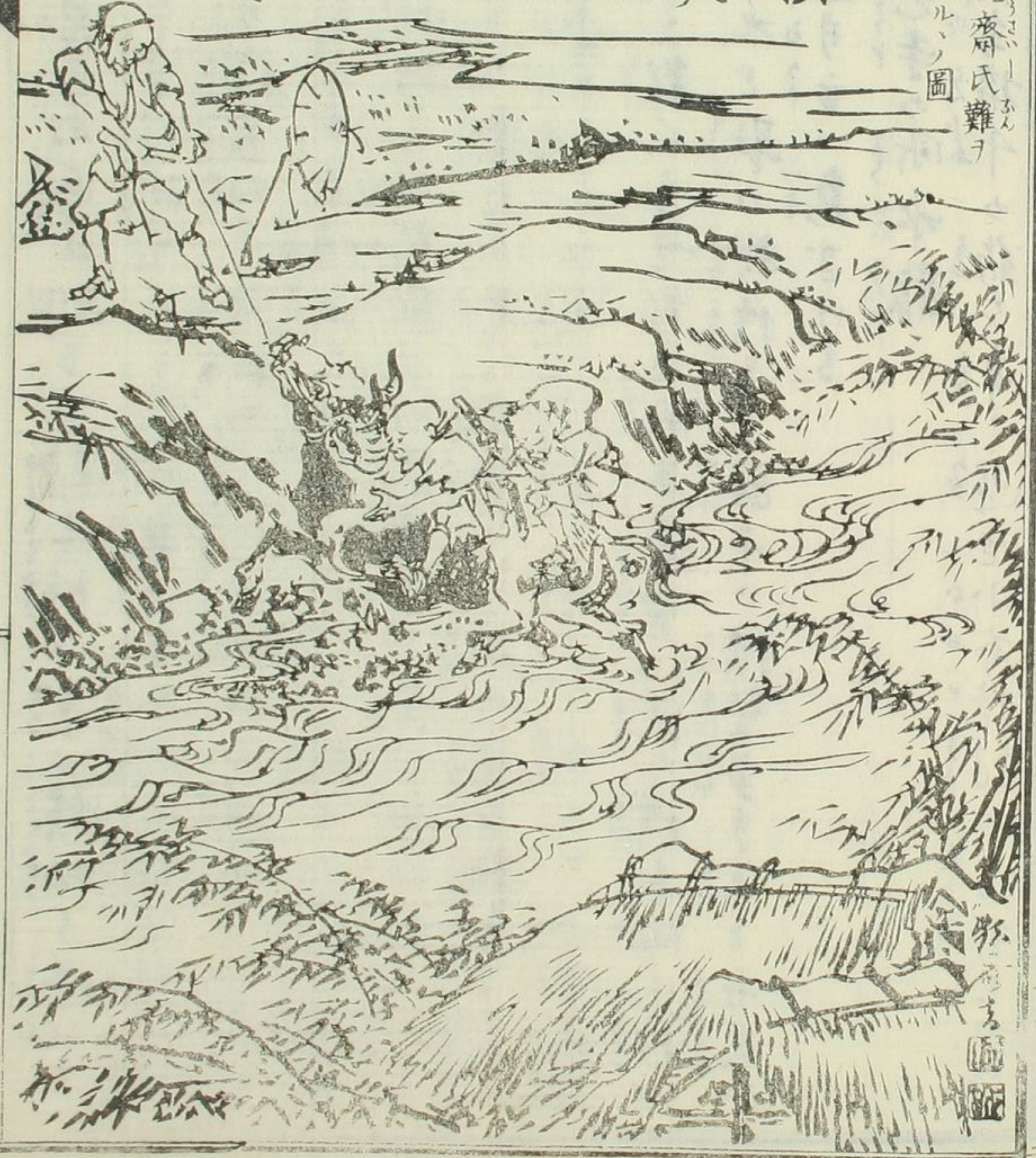
の知己申急重家を訪んと須
 板の所を經し小布抱て紙之
 んと彼方此方の家の處お引
 是行しに日天章長閑ふ風
 漫如あけきを松の葉に
 増らる吉と活しは向ふの
 方に松の木ありて振る交
 一たる枝を少摘あつと
 見る松葉澤し言れ松
 を傳の明地に這みり又
 木枝竹おを集めて構せ用



外二ノ八

意の瓢の酒を招き纏へ後温めし自方ハ草擇り出たの
 宮中に待合るま折うら一人の野蠻男出来し「ヤア、海
 ハ己の地所へ火を附たふ了簡せぬと敷園や急噴言成し
 負ぬ言にあり候令其方の地所もせし圍垣多けせハ区
 の明地と言せも果さば彼の男が仍の酒落さしは所ハ
 領をを逃しと申出しハせぬ待て居をれと言捨て来り
 へ走れしがむるま小焚火を消させ片けりしち松の園ハ
 り果たれども戻り来ぬや急噴言と為るま了餘お出
 一所不どけと掛草屋あり此処より客を聞くと入り
 柳けり所番の志深に酒を話し客の事を問と志深ハ茶を
 汲く来りし云彼ハ權十と云ふ村ありに在る程多の無
 馳往しハ伊豆を連せ来りお金を捨り取んとて人ハ道を

只空然 曉齋氏難ヲ
 必す民お掛
 らんと聞ま
 曉高氏ハ苗
 者お目配せ
 して其様お
 らえの所お
 戻りて待ん
 と茶代を重
 つ其処を立
 出り



老漢に影の見えぬ所小と
兼をふけ法と中斗り小
苗名流とも酒息吹て居折
牽つ来る者あるや急呼止
の権十とて此処りや名取
渡しと通んとて牽たる牛
牛小曉尚を乗せ向ふの途
一出る道さそ教くらせ
因ハ書取るれど耻ハ控
小布施の馬井方一急さける

○善光寺の所水難

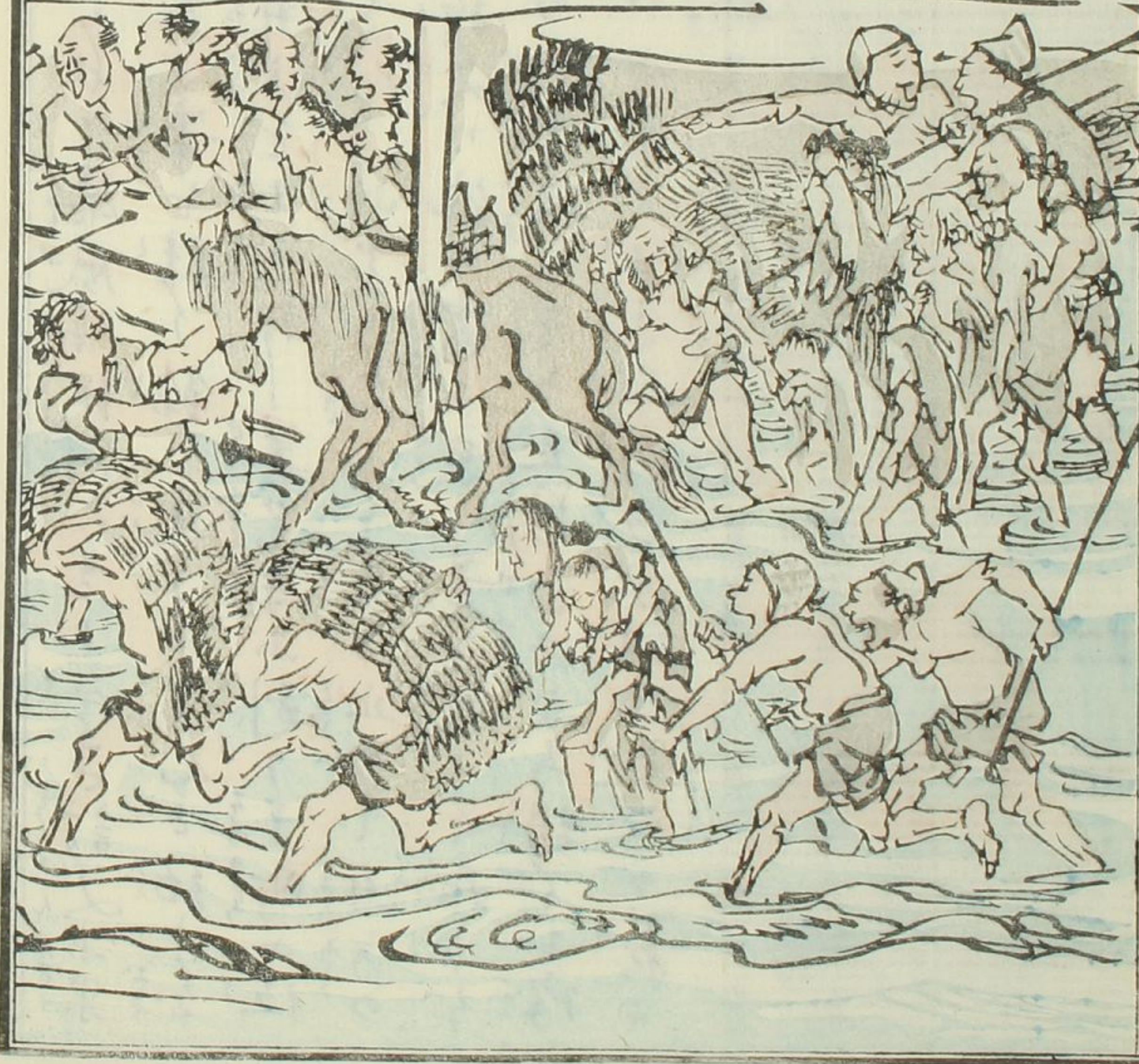
曉高氏ハ穢多橋千の箱を辛く遊せ小布施の馬井方三九郎

方一到りし小引留られて
有ら移む七八日不ど筆
逃る如くし高井方を出立
渡屋小右衛門の宿を投下
名所古跡を宮一歩行又ハ
小西洋人が東石の一季候
り出分て三四日ハ小止も
り同六日同七日ハ朝ヲ下
善光寺の御あ迫き筑摩川
溢れ掛まら抑筑摩川の佐
の方三三峰より出る梓川
形を費き河中島四郡の信

と難本林の中一横切り道
水勢暴き小川の端は止
川に向ふ小道ありて牛
及ぐ小伝を語せま夫ハ
早く御所終く川を越
下りて小布施の
此の種を做し招
お笑ひ

屈風隔紙河くせと
餘ハ戻りし書人と約
善光寺不到り其所の位
是を止めし近方の
五月はごろ頻々
廿五日の花
如くありし
数里の間に
出る川と東
伊倉のふおて落合は久
又厚川の駒が
出

筑摩安曇更級
 水田の境を流る
 摩利の塔を公と
 郡の流摩利と
 後の新河に出
 信濃川と呼ば
 斯ま日中
 の一二と称せら
 者故霖るの中
 多雨と山の水
 一度小押出
 一うバ地所



村を一面の水と
 あり渦巻きて流る
 劣ひ流のちるが
 るまの家と流る
 と毀るれ是と
 けられ相接け
 る様実小哀れ
 なるも嘆富氏



善光寺近傍
 洪水ノ圖

惟之義

信州戸城山圖
州隱ノ



を喫き豊廿八日の朝尚吉と連れ佐と屋小出傍門が栗由小
 見物小住きたる故其場の有松と字一なりたせど此処小
 町と看力の院小住よ

○ 睦富氏戸隠山勸修院小招持せらる

信濃國安曇郡戸隠山の善光寺の面北五里小在り号峯峯無
 としと屹立し越中の連岳西小聳え世小々妙香山幸ひ三々
 南面東方山ありざるハ有し尚山の中院ハ思魚命堂光院ハ
 嘉壽高真院を幸力雄命地主神ハ九頭龍権況みく前當ハ天
 台嶽院院西界山顯光る三谷一山の坊舎三十六院向ハ社領
 多石造管料三百石正信事科八十石の大神ありハ中院の
 本社を建築し既小落成されども天井の繪と書す手
 考堂ハ一山の衆徒野を悩す事久しう一睦富氏が善



外二六



信州戸隠
荒倉山之圖
廿四日堂
廿四日堂

郁洞

鬼カマ

光寺小立を聞き三十六坊會議して遂に當勸修院より使
 者と来らして迎へけしハ曉高に捧めし書人にと首深
 茲に頼まを認の掛り一画の皆お捨置百束小松中尚台と
 引き連れ戸隠山の當勸修院まで往たりける折戸隠山の
 其麓安村より一里登りて坂更り又一里餘登りて飯
 繩系の馬居小到り一の麓表より中院まで五十三町中院上
 う奥の院まで三十町あり曉高の勸修院小来りてより毎
 夜も洗の籠の事流し灌りて後松攝史も暮りて止しとて
 往き得ざる三十所の嶮岨を攀り奥の院平力雄の社小集拜
 あしたり茲に又勸修院の中僕小菊松と云ふ若者あり一夕
 べに事ありて後またるり夜更に奥の院の神燈小油盛んと
 松の振照一岩山お名けり大木の枝は松と云ふと生取る至



信州戸隠山ニテ
 曉齋夜中奥ノ
 院寺僕菊松
 ト途中奇談ノ圖

信州戸隠山ニテ
 曉齋夜中奥ノ
 院寺僕菊松

さう暗き九折坂を登り往し山上より来る者あり異を
あつり相明を揚て是を忍れを眼見くと光り鼻高くしを
口を傲したる天狗ある故キヤツと一聲叫びて作反倒たり
然るに菊松より吾物と見こるの喧言が夏の院く余指の疾
りありみぞ是も又拘りあるがら投おせし松明の光りに倒
きし者の顔を見れむと男の菊松より故抱き起しし汗を吐
し果ハ笑ひて別れたる此処小園せし其何菊松の目よハ
斯くぞととの姿あり

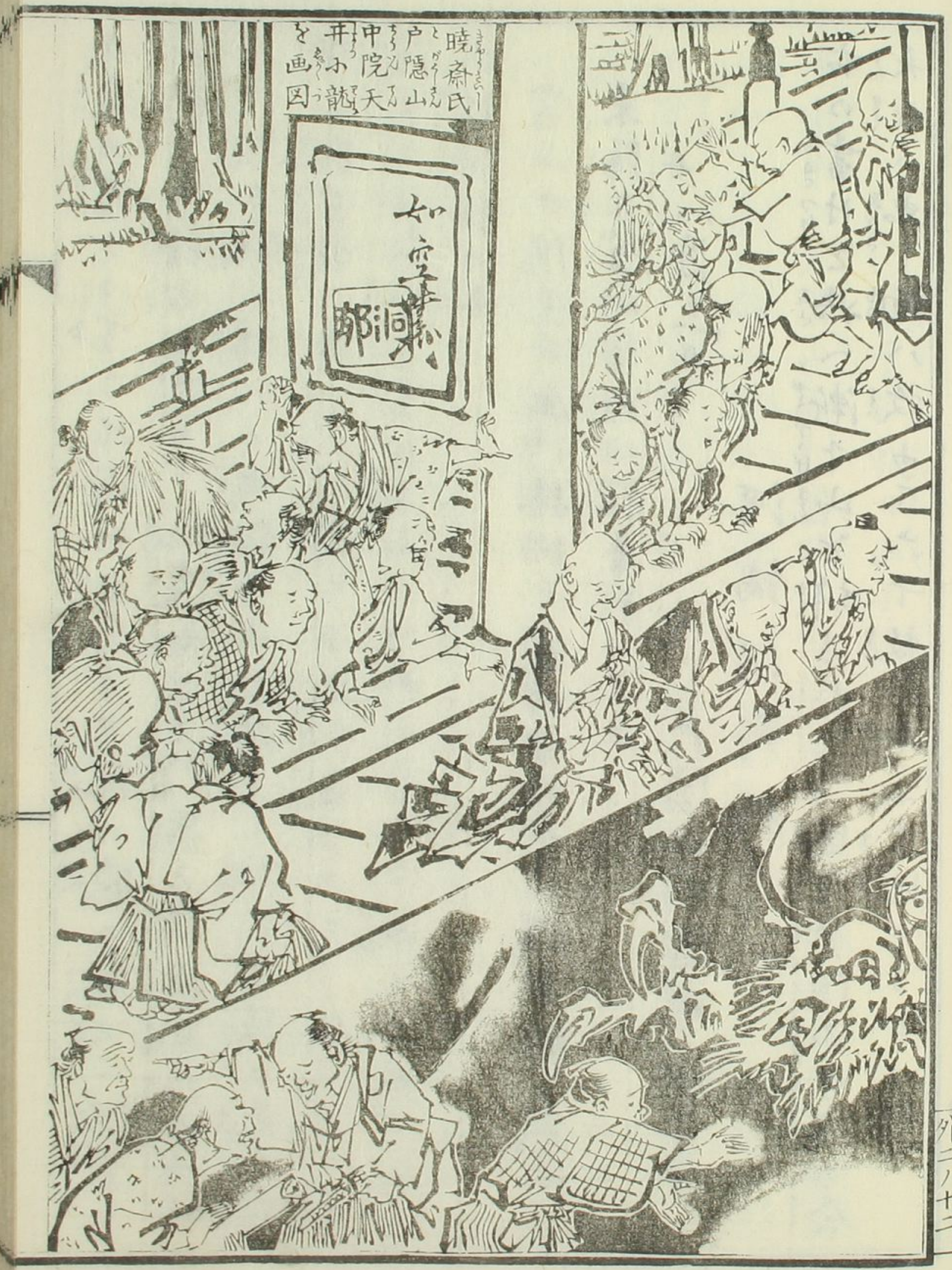
○中院社の天井小籠を畫し

戸隠山の中院ハ近國をぬの古社ありて揮毫のそ井十間四
万の喧言中天井ノ描んとしそ再就奥院く筆揮り結
既ふ漏れれむ一山の望みお任せ筆を掃り小籠一三十

如く我も由援け々俱に擔ひ法んとて鯉を又大盤基の中
の書生大勢掛り悪ぶが岡へ奔り法ま辨天の池に放ち遣
りたり好時よしそ師の鯉を画ふ人の末ハ心附さる
不思議の筆意を得たりと云ふ又ハ鯉の吹くる氣の後者
向ても今ふ其行たるを解せざと云ふ

法妙寺小仁王の圖を取り帰路賊小出遇ふ

東府の西の街外き小籠司が谷と呼ぶ地あり此処ありし
鬼子母神ハ冬場の人群集ありたる御堂ありしが今の境内
寂たる法華宗を法妙寺といふ常寺の表門小安置あり
るに仁王尊天を運慶の作とて其名最高一師一日此籠司が
岩小注き仁王の像を宮して餘をそりしが梢小鳴噪く鳥の
聲小心附首を回らしそ見せハ日ハ西山小落て四辺霧降



曉齋氏
戸隠山
中院天
井小龍
を画因

ありてり茲に於て心驚き道の遠きも忘れて思ふ寸日を嘗
 たりと急き矢立を腰に挟み官を帳を懐中ありて法妙寺
 を立出る候に早鬼子母神の堂ありて燈附たり因を豆を子め
 目白甚の通るを真並水邊所一あり江戸川端より旧水戸
 候の百間長屋下今の砲兵本殿の所一あり頃既に成の
 刻とあり四辺なるを發射する故門を守り犬の聲揚げる笛
 のと出る師の来る淋しき杯の頓着せぬ故稱法妙寺の景色
 ろやと胸お算しそ注筋お白刃を提ぐる三人の男安忍と現
 れしを左におし師が袖を捕んとせし不怖り突降け膽魂魄
 と諸共お豆を飛しそ逃出せて三人の賊ッレ捕つろと聲掛
 け白刃を振て追ふと急あり師の雲霞を踏思ひしつ水戸邸
 より流せしる洞門お渡せし石橋の端を走りて通る越へと

小庭の崖より下りて逃げ出たるが他の家の裏口へ付當り
如何にも詮方なき事元來知ざる門前の腰拭茶店故呼起
して誤を話し坊への内証を出し呉と恃めを陽小足を肯
陰小別當所へ告しりバ忽ち小又引度されたり然れども
彼是と不都合を言ひ立止るべからざるを承しければ三十
六坊協議の上

當山中院天井画河捧納之靈時季冷季は揮筆難成依々
來陽山望山皆成御様奉納の上

八月十日

河鍋泪都板

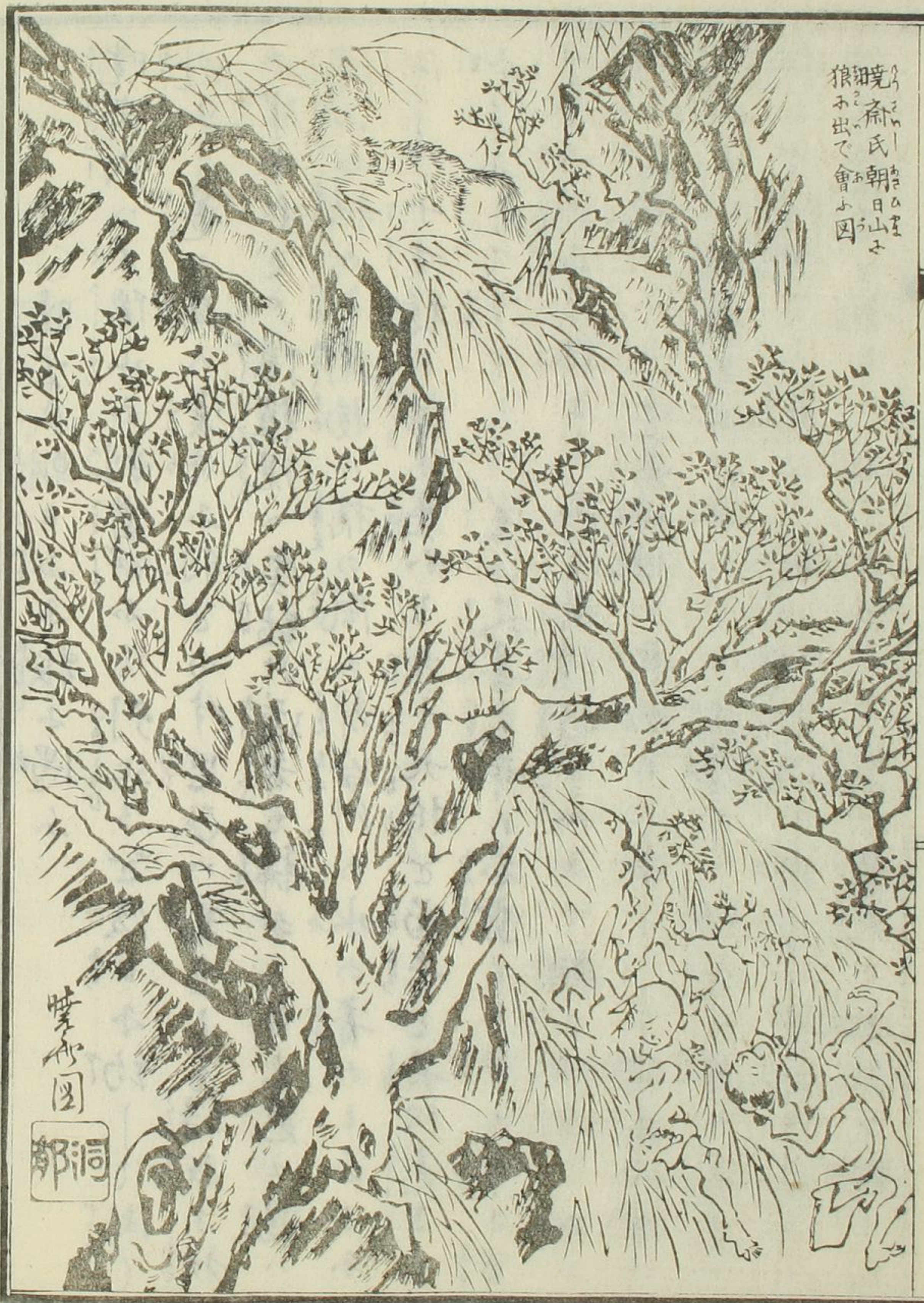
戸隠山別當所 役者印

右の書付と興一漸下山と許されたり因て戸隠山中院の合
天井の画一物ハ枚少て六十枚ハ今小未地たりとす

○曉齋氏朝白山小狼小遇ふ

曉齋氏ハ戸隠山の別當所にて引止ると後日小約して漸く
逃出さるる鳥の雲丹小羽をのす思ひハ為さども時既小秋
の半あれを戸隠権現へ参詣れ道者も稀なる由思見る物ハ
満山の秋の毫間物の梢の風の孝谷川の水の音のこふる小
淋し十寸穂の落小塞がる九十九折を尚吉と共に走るが
如く小して下りたり爰小又善光寺の本堂より申の方小當
甲て赤花山と称するあり所謂朝日山小て朝日右近と云し
人の居城あり一変最峻岨の悪地あり幸うして曉齋師弟ハ
此山小出猶峯少海岨と巡り羊腸なる細道の曲り角少て
計らず彼方より來りし獸小往合何の氣無し小足と見ると
目を金毛と放ちて丸く口耳を裂け骨太く毛針を做した

曉斎氏朝日山
狼不出會小園



曉斎氏
朝日山

外二ノ十四

るハ強ク画く雲の狼をれが愕と驚くと膝頭が夕一震ふ
 ハ苗吉も同トふて遊人としてても足居らば苗吉さきん崖踏
 外ハ侍の谷一轉り落ると續いて曉斎氏も折げ込む却合
 小思ハ叫と言と狼も出合頭ありう驚きたる様うて致を
 廻一遊往きたる故二人を怖く木の根草の蔓小取うけり谷
 かも色一這上り四辺散眼く今小を再び狼が出來りりと
 怖くつて人家あり方一ぞ急ぎける

○曉斎氏更級小油屋五郎右衛門と月と見ろ

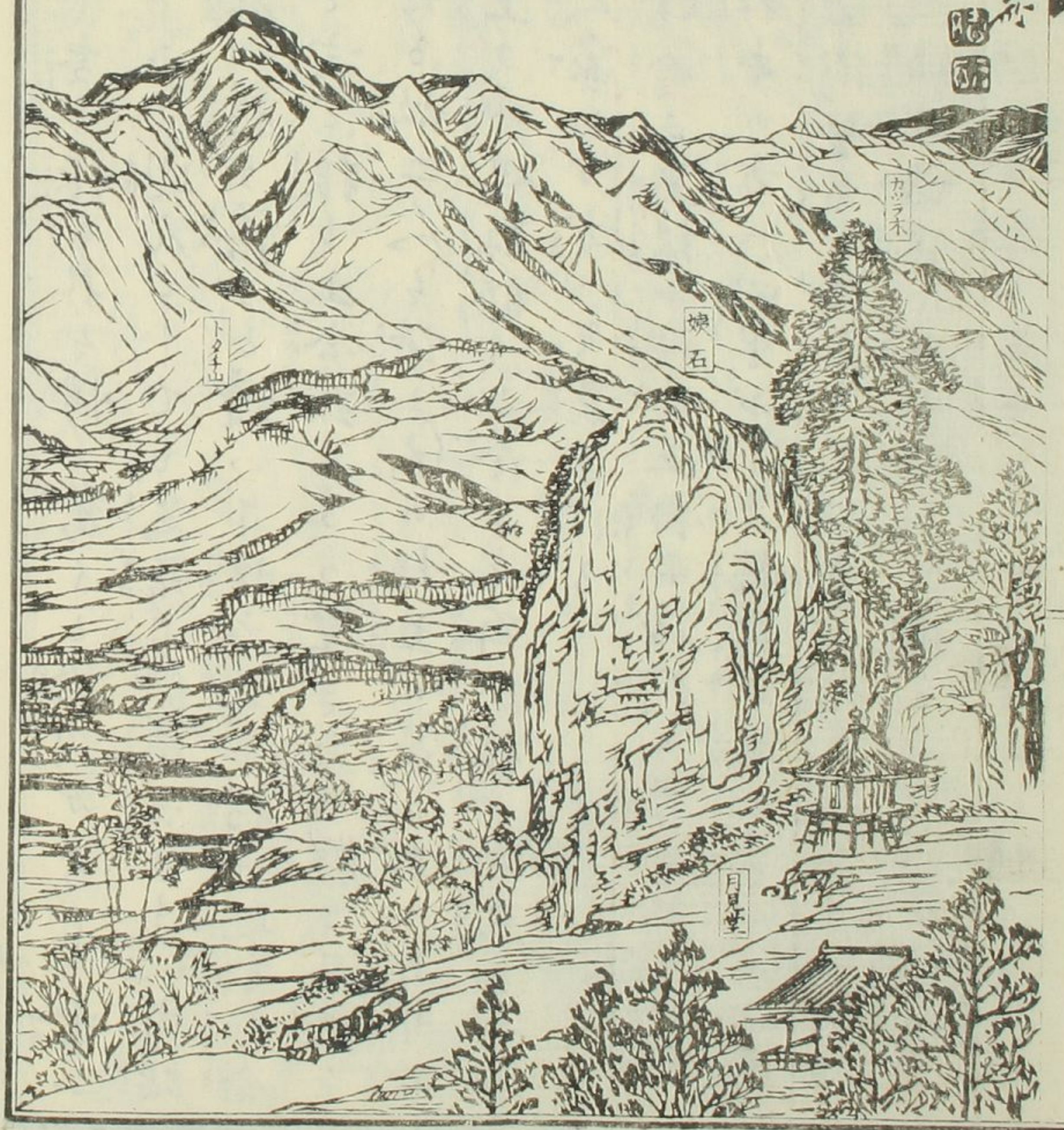
善光寺より杉平の方一四里小く稲荷山驛と云ふあり高
 家軒を連ね市街繁昌の地あるが此處小住小油屋五郎右衛
 門と云人の風流閑雅深く画を好むの癖ありと以て曉斎氏
 を招待せしむ時ハ秋の最中あり十五日ハ特小室曉斎氏

放光院長樂寺
月見堂の図



外二七十五

修業所
[Seal]



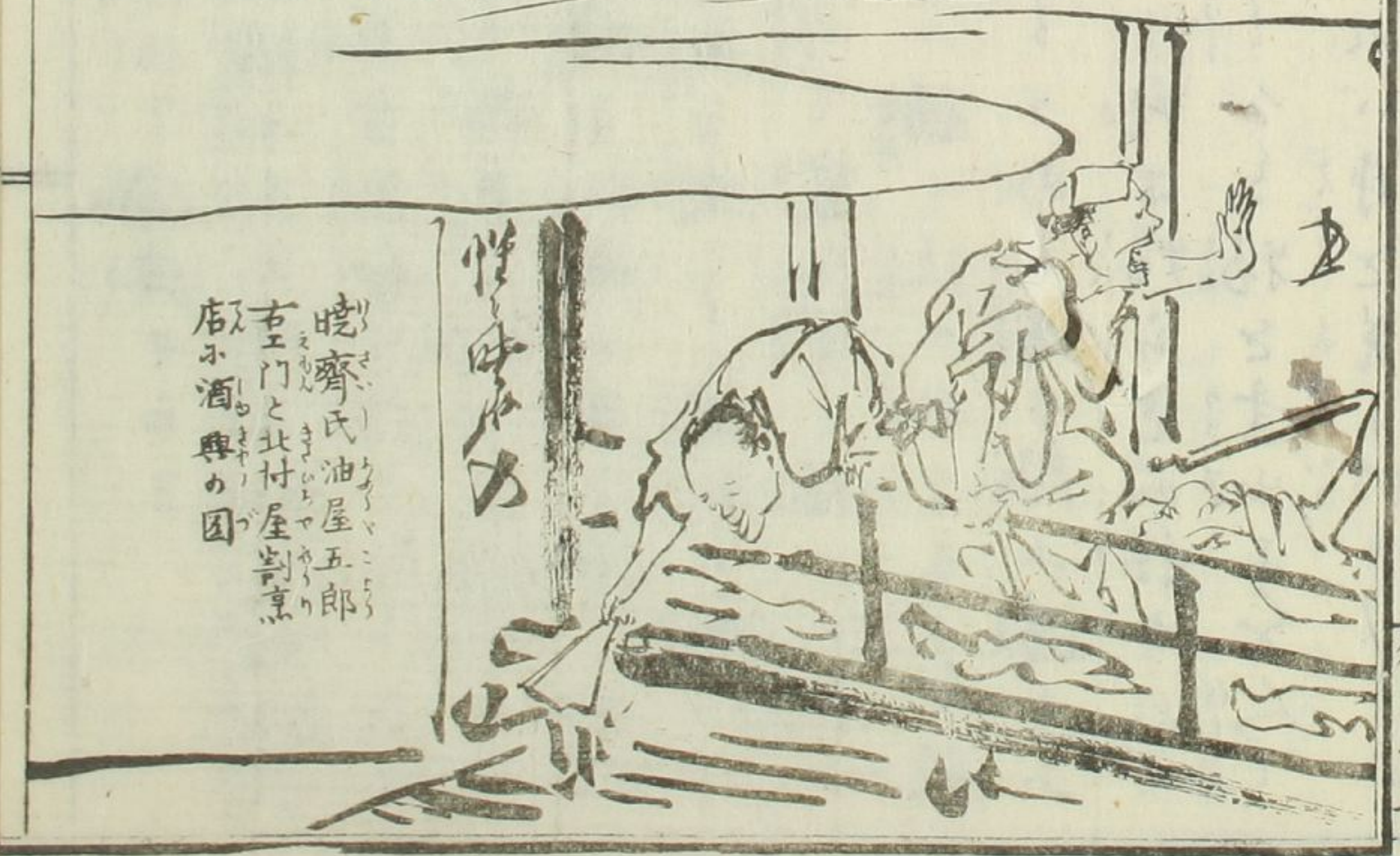
静りありけきバ更級の月と見んと同志五人を築め晴る
氏及び苗吉と誘ひ申の刻頃より姨捨山へ出掛たり拍更級
郡姨捨山ハ稲荷山驛より一里と距り所ハ一放光院長栄
寺の境内ハ月見堂あり當所の十三景と云ハ冠山。更級川。
田毎月。挂樹。姨石。螺石。姪石。宝ヶ池。小佛石。鏡
臺山。有明山。一重山。雲井橋より眺望ありて歎ひ稱
ふる勝地ハ又ハ總て能く知る所あり再説曉奇氏ハ油屋五
郎右衛門ハ連らきて姨捨山へ往り見りに稲ハ今花実を結
ぶの時ふる故彼の四十八回小窓ると言ハ影を其俣園を
小々由ふまも鏡臺山の鏡臺ハ抵まら月鏡を思たるハ画
術に苦しむ我ハ胸中をも思さるるハ思ひ一筆を以
て其真景と寫し終まら割菴一話し用意の者ハ瓢の酒を傾

けつ詩を化しと吐き果々手と拙謡を唄ひ衣をいつ
置露小濡るも知らせ月を賞し居たりと若ぬ眺望の
面白さ一人ハ今より直小善光寺へはく嫦娥の様ハ女芸
小酌を取ら終ら暁雨ハ陽系ハ別宴と聞き快を考さ
む々如何ハと發意すれば五郎右衛門を始めとて開ハ面
白ハと皆同意あり又より猶出初し盞の取り遣り一瓢
空とふせバ酒賣家を見かけ次ハ小立入りて之ハ小次セ酔閑
ふる小従ハ興ます多ク夜半過る頃ハ小遂ハ善光
寺に至り同所ハ一等と稱せらる割烹店北村屋忠右衛門
ガ門の戸叩いて既ハ森たると呼起し油屋五郎右衛門志達
あり曉富氏苗吉と他五人動也ととおしと姨捨山から
又捨らきて中ハ小来たれを傾く迄の月影が見えら府敷一

通しを呉ふと言ちらし業内小
 引きたる席小の即ども道の旁き
 と酒の酔小堪られれば皆その俤
 小假寐しを枕おせられ夜着掛
 らるも知ら下朝まで眠りし
 一人目覚まし二人目覚まし
 目覚め者へ引起し嗽ぎ顔洗ひ
 ろどし一回座小即と女共が
 持出た酒者小頃我今口の味夜
 と遠び尋ら敵め美酒が省ぞと
 て飲ぬめたるが曉高氏ハ之果
 自ら許しを擇くと名乗る人其



他由電の子大蛇負ず芳らずの
 上戸ふまは蓋ハ宙を飛び徳利
 ハ尻と居る間あく酌取ら女ハ
 是が為不可惜袖口を切らすあ
 るべし斯きハ何もの勢ひ小業
 ト善光寺小居らたけの藝者を
 呼下来ハ之味線が辛くてハ社ガ
 浮ぬるとた頭め坊主下引ハて謡
 を唄ハさ踊り興トけ騒ぎける故
 其日の夕方小ハ皆大酔しを泥の
 ぬく小成りたりける



曉齋氏油屋五郎
 重門と北村屋割烹
 飯小酒興の因

○曉荷氏乱醉狂筆を揮ひて捕縛せらる

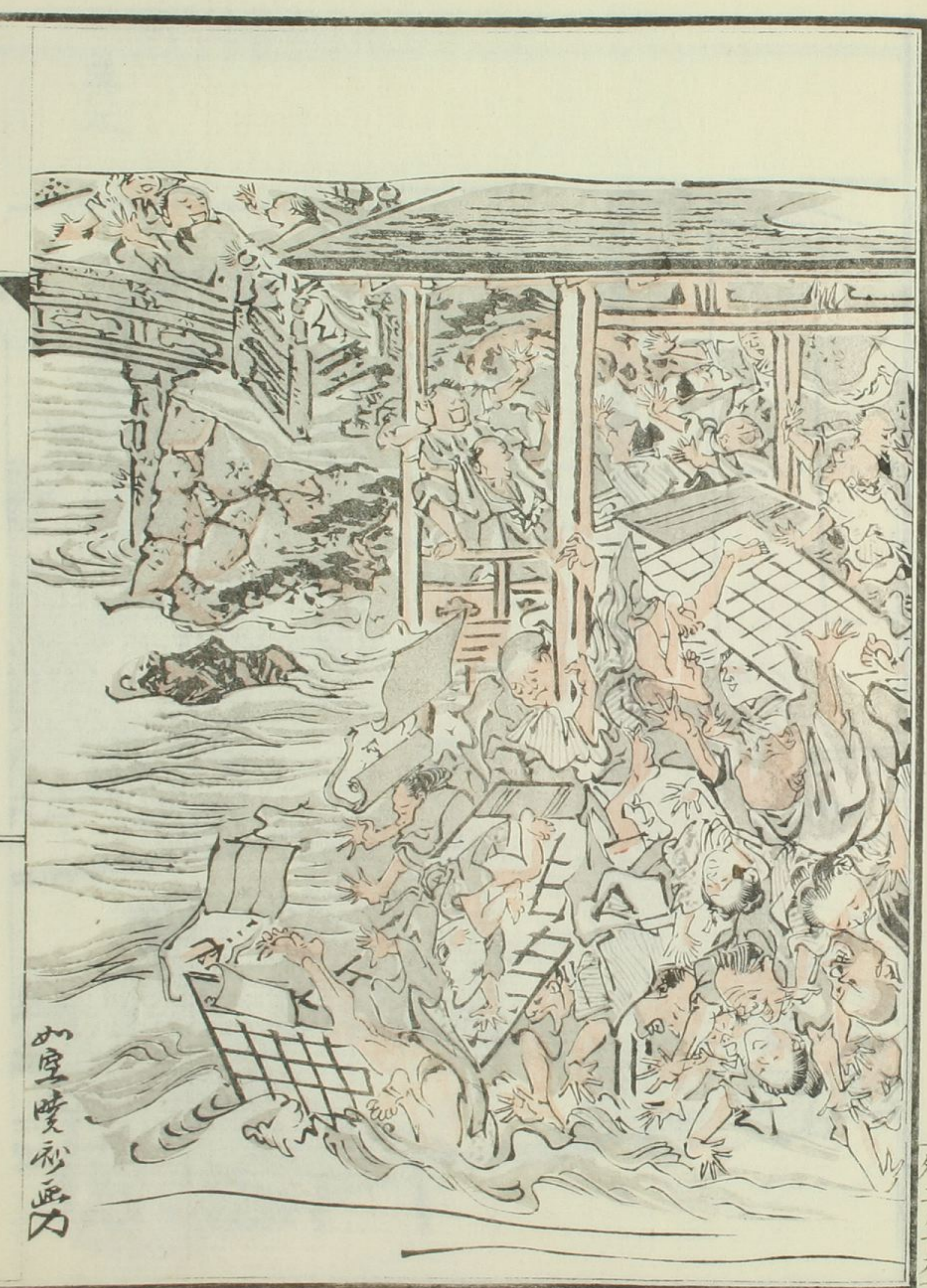
明治三年十月六日東京下谷不忍橋西天の境内割烹店社長
吉方少将に倅人具角重雨控ふる若主画會を催したる小曉
吉方少将に飲酒連るると以て席上の揮毫と頼まき朝平とか
ら書画の令進小臨し小會主も頗る乱酔の名を傳し若故
東主東宮の顔も見ざら前より不益を廻ら徳利の底を押
つて飲路めり色む人集り群れと以て宴を宴く頃小既小
三升餘の酒と傾ちたる故曉荷氏ハ酔て沈みぬくも中
も氏ハ酒氣あり龍の雲と得たりりぬ席の風も遇るふ
以たれば是も身体も愚弱くあはれ少根らきぬ狂ふれど
も筆を拵へば蒼活費して奇く妙くある物をま出まを人
身一扇畫の筆旅する一紙濡れば舟と若一べりト小

酒を造りて深筆を揮ひぬれば六升飲たり七升飲たり氏ハ
鬼灯提燈の如くみられども筆を揮ひて屈せざり折つら傷
お下高登り中隊もああり今日王子田一系うたろ小外國人
騎乗切りみり来ると榮石の若出むりけぬハ西きんある
りと同と馬廐を兩人召し連しり一答へたりと云が耳お
り波号子笑して遣んと思ひ是長島の人物ハ二人しを稽を
履せ居るゆと画き又本長島の人物が太公の鼻毛を後と
挿を画きたりしハ画作言貴の人を嘲弄せし物と認ら其
た小松官使小捕えられしりバ席上の混雜騒動の圖ハ歌
ハ七一如くあり然れども此とき解つしり一高が敷ふ
目ハ動くをども四辺朦朧雲霧の中ぬくぬく物ハ何
たると見分る事能ひりやハ笑けども舌廻らされむ詞を出

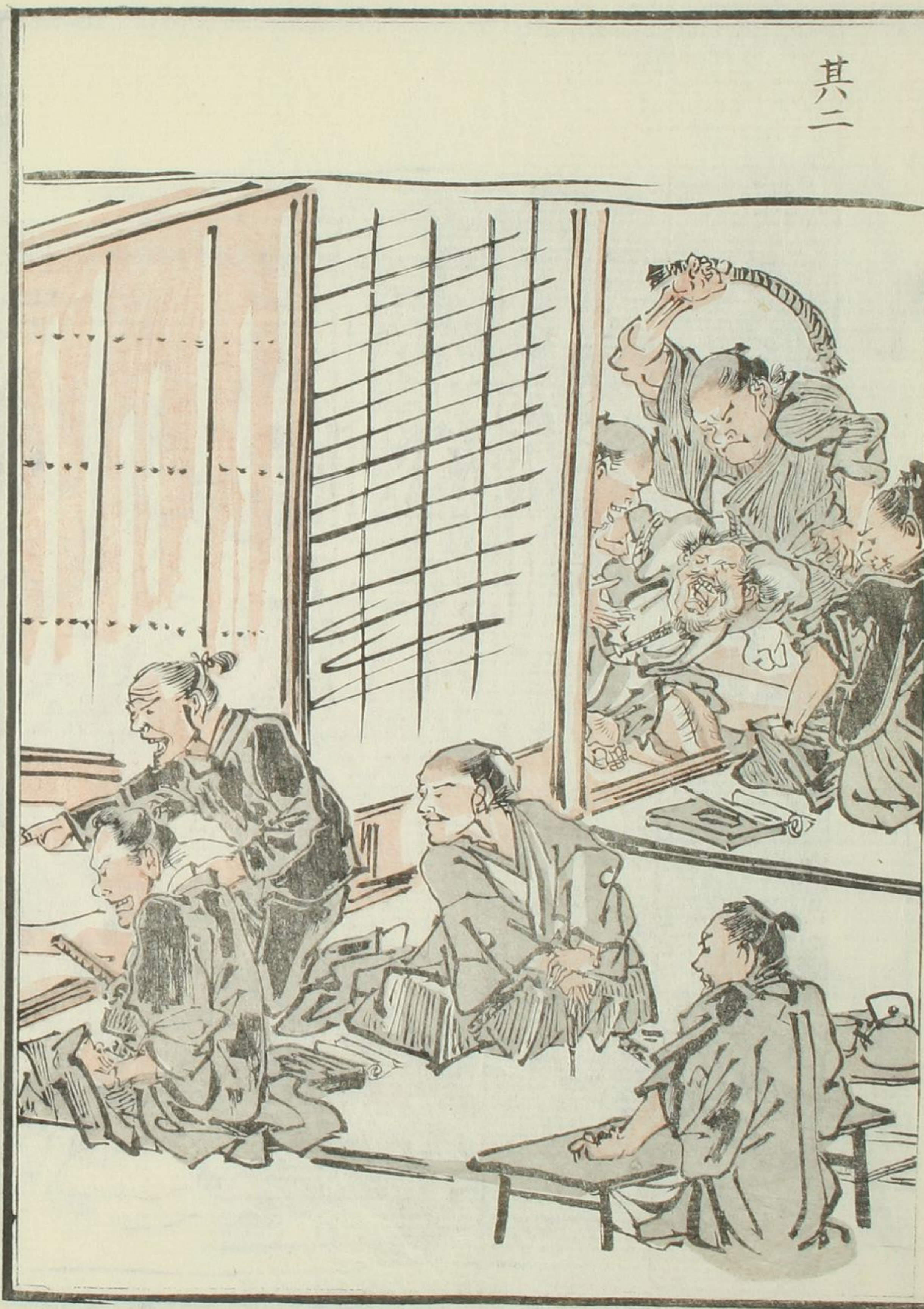
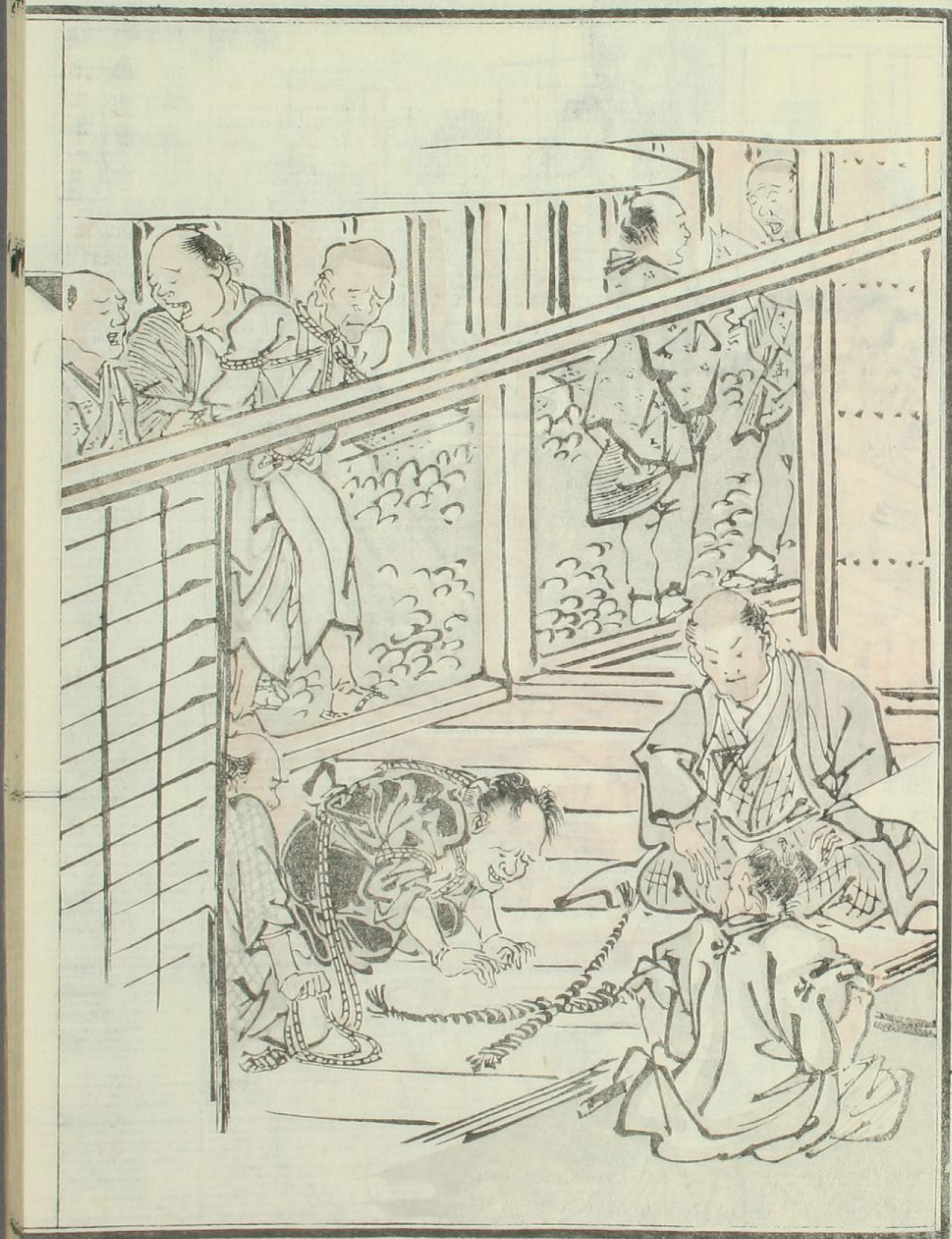
上野不忍岡
三河屋ニテ
其角堂書画
會ノ席狂齋
縛サルノ圖

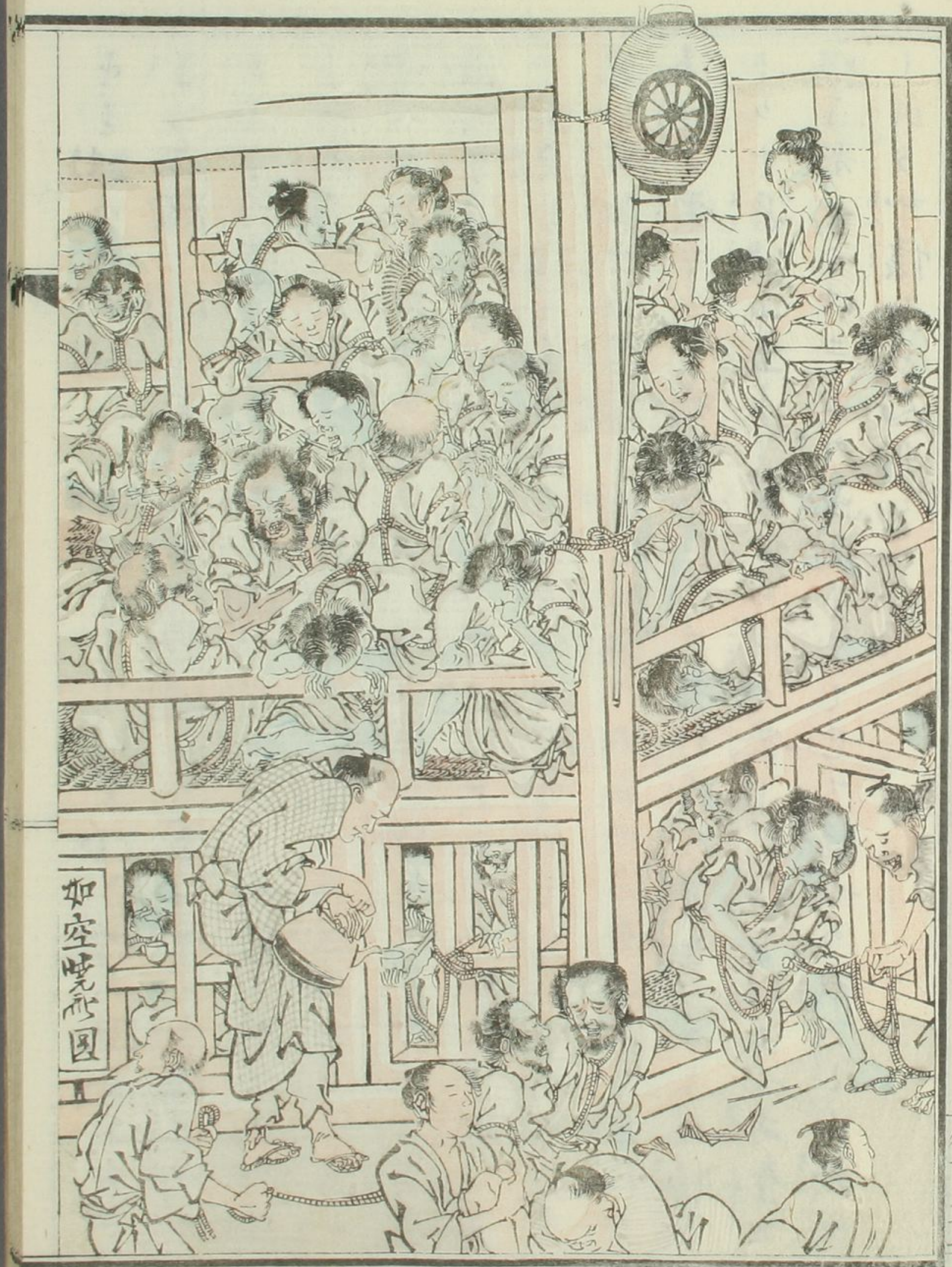


外二十九



如堂慶元画





五

外二ノ二十一



此と雖も只踊りの身振りして引きけき終ふ獄舎下さ
またり歌う歌う聖歌あり酔醒その事と聞て千悔万悔を
まじり詮業をけきい只只路の外にりし同月十日西呼出
し小成る右の所紀し者たれとも何事と云ふねあるも更ふ
堂之をれも池の所答に為し難き由と述まひハ山下とあり
再々禁固させられたりしが聖年西月三十日小あり漸く友
の放免と請て去矣と見ると得たれも忘れざる由と
思ひ牢獄中の有様を圖し我が二三のる身小一但我ら
酒狂の業ぞろの戒めの中も考さるとて書置たりとの物為
しりも其後小出し牢獄の中の書し其様を記し其業と
以て警せき此二三の画圖少附て見せし後世の戒めとも成ら
む所が中懐あらんのこと

○ 暁高氏博覧會の鴉の画を出す
明治十年秋友東京上野公園内小於て第一博覧會ありし時
晝せし通り此雅を出し其百圓の空價と附たりし掛り首元
一餘り高價の由を以て難せり小暁高氏答て是ハ雅の價小
ハ行へば是を不數十年の同画の為小千辛万苦して得
たら而の價ありは友の縁ハ天下の博覧會なる故求め人の
有無小違らず小小價の白價と附たるありと言しりハ掛り
當も更あり止たり然る小其様を日本橋西河岸の葉子高業
を標主人が買ひたりハ暁高氏の面目ハ一々幸福と言ふま
之其後少総相尋尋不遊び丸松健造とソノ人の業也少少
門の白蹟を見約ありハ暁高氏一人先小来り初根川の坂
し場あり近辺の風景を宮後日談話の二冊とも成んと持帰りと云

曉斎氏博覧會
出品の鴉

曉斎氏
同



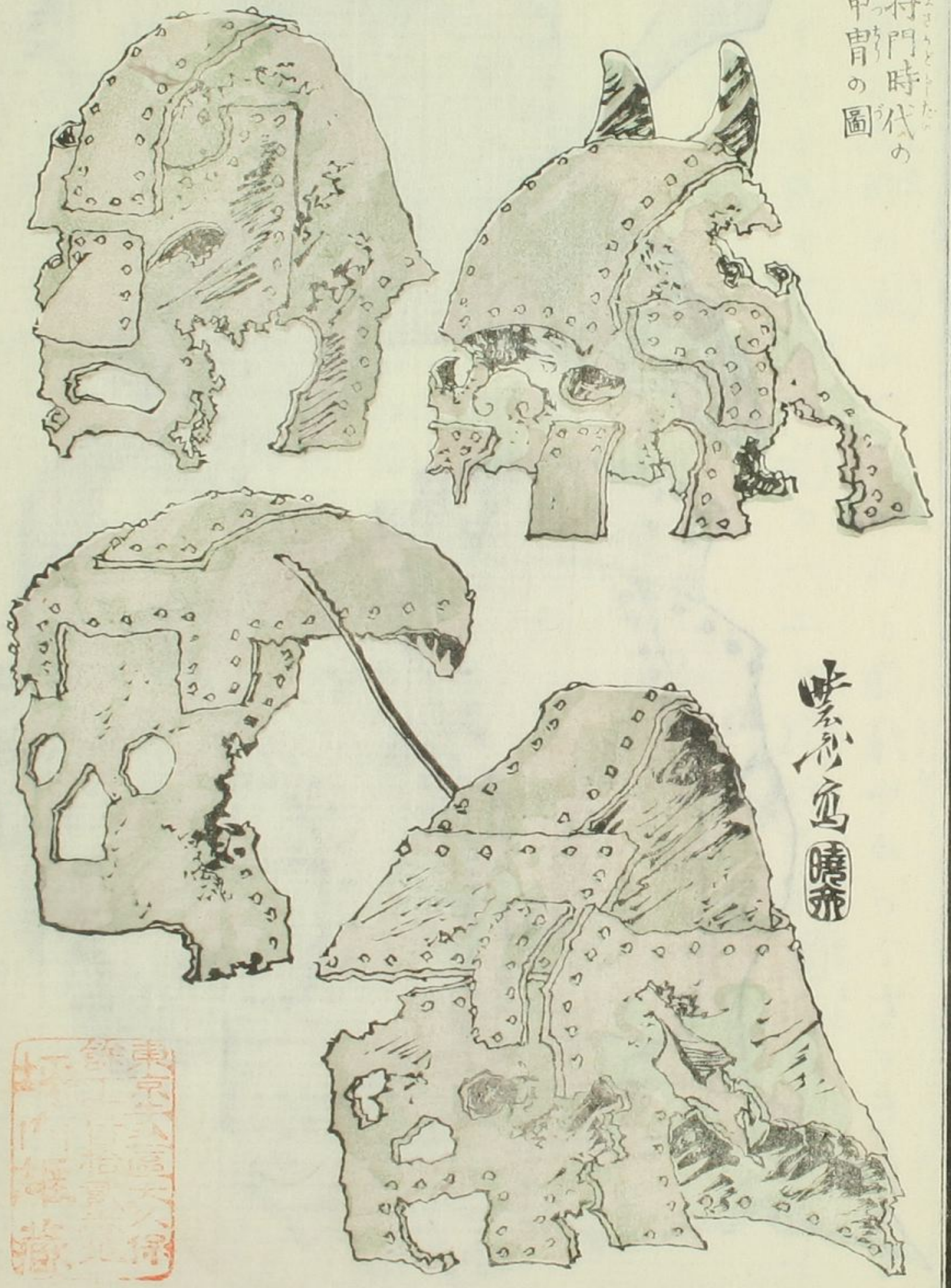
○平の将門の具足

曉斎氏常野の辺を漫遊せしと記す
下総國馬郡花野井村
少佐丸松建造方の東内少を東を其の寺に寄りて
甲冑を手に懸け當り及び一箇の茶巾子也
此の物と云ふ因に其所持つての寺に乞はれを一覽ありたる小宮小吉
代の書心をして疑ひをのびす物少りと縁を互に換字して
持帰りたれが當時代を知るの考証も成んりや思ふ故中
必ず掲げて如事家の覺小備ふとあん

○英人ゼーポンデル氏

英吉利の人ゼーポンデル氏其本國に於て波の油画及び
圖を刻するに因りて大に精妙の術を習たり然れども筆を
を以てするに如く画を好むと云ふ相阿弥の画がきし
驚愕の筆

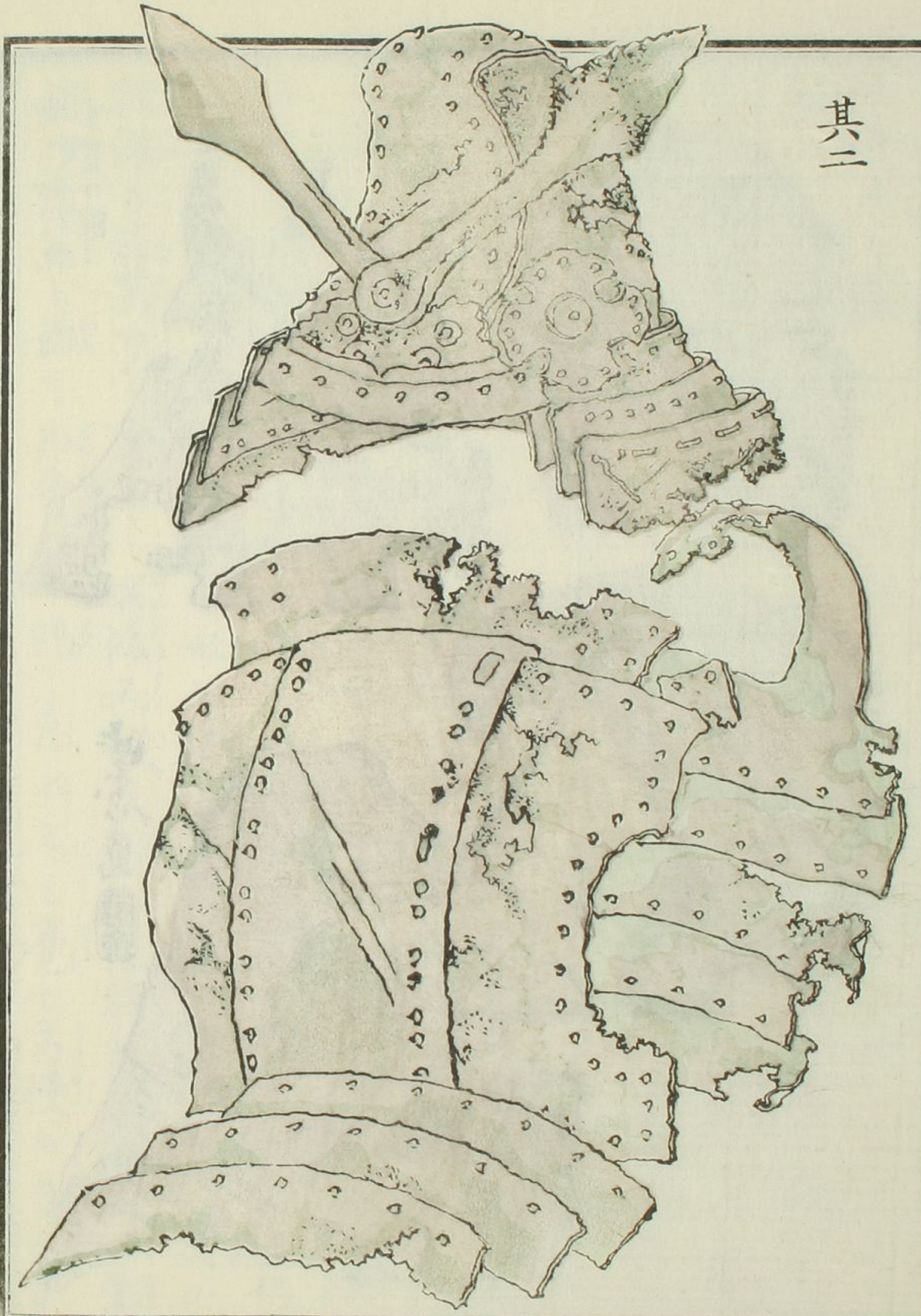
将門時代の
甲冑の圖



紫心馬隠赤



の兩中の鷲と屯しそ他種々の古画を集め餘暇あれば是を
 看ると上あき樂とて做し居れり然る亦去頃日印航し
 官に附たれば幸ひは時を以て日本古画法を學ぶんと思
 ひ當時有名の人の画きし物を集め是を熟視し又熟考し
 たる後山口氏に依りて曉斎氏の門に遊さんと言入れ
 る曉斎氏之を拜しコンデール氏ハ油繪圖列小巧とあるを
 豫て聞及べり其人を教授せんハ僕ノ力の及ぶ所あり
 と再三陳謝したれども聴れど遂に所方の約を結びし彼
 小後者ハ之も修く筆力忽ち他と異し驚か令るふ至りた
 り且コンデール氏ハ做し居るを察する篤實温厚ふし更
 狡猾の所置ある事あり其後又伊予初め皇族親王家と紅
 館伊序画を於て出會あり謂したれども毫も高慢の色あり



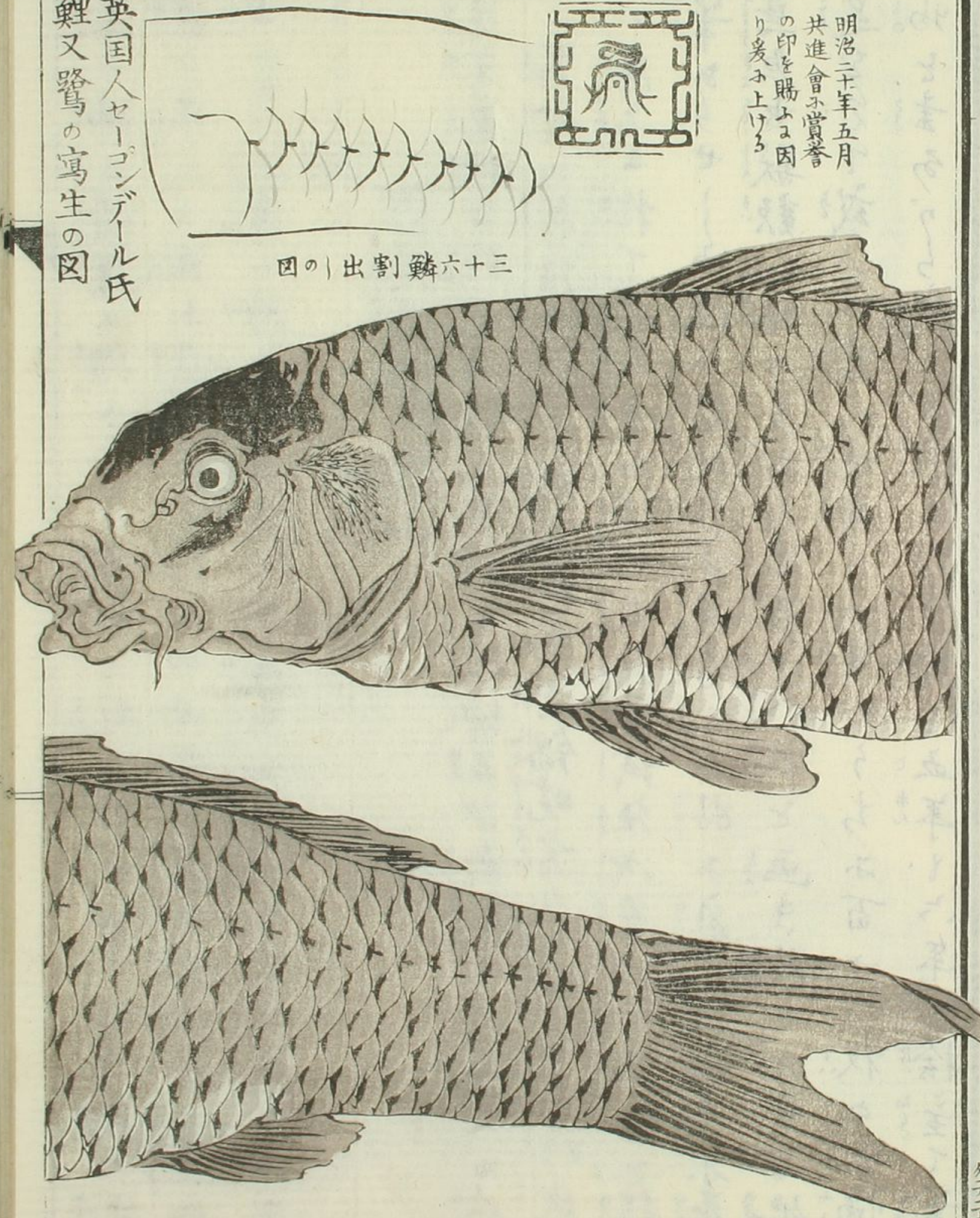
外二二十五

ハ突小文の風ふやありんと感歎せらるるざりきたふコ
ンテール氏が宮生の図の一二を掲げて我國人の為ふとす
とある

○鎌倉新居間魔王の図

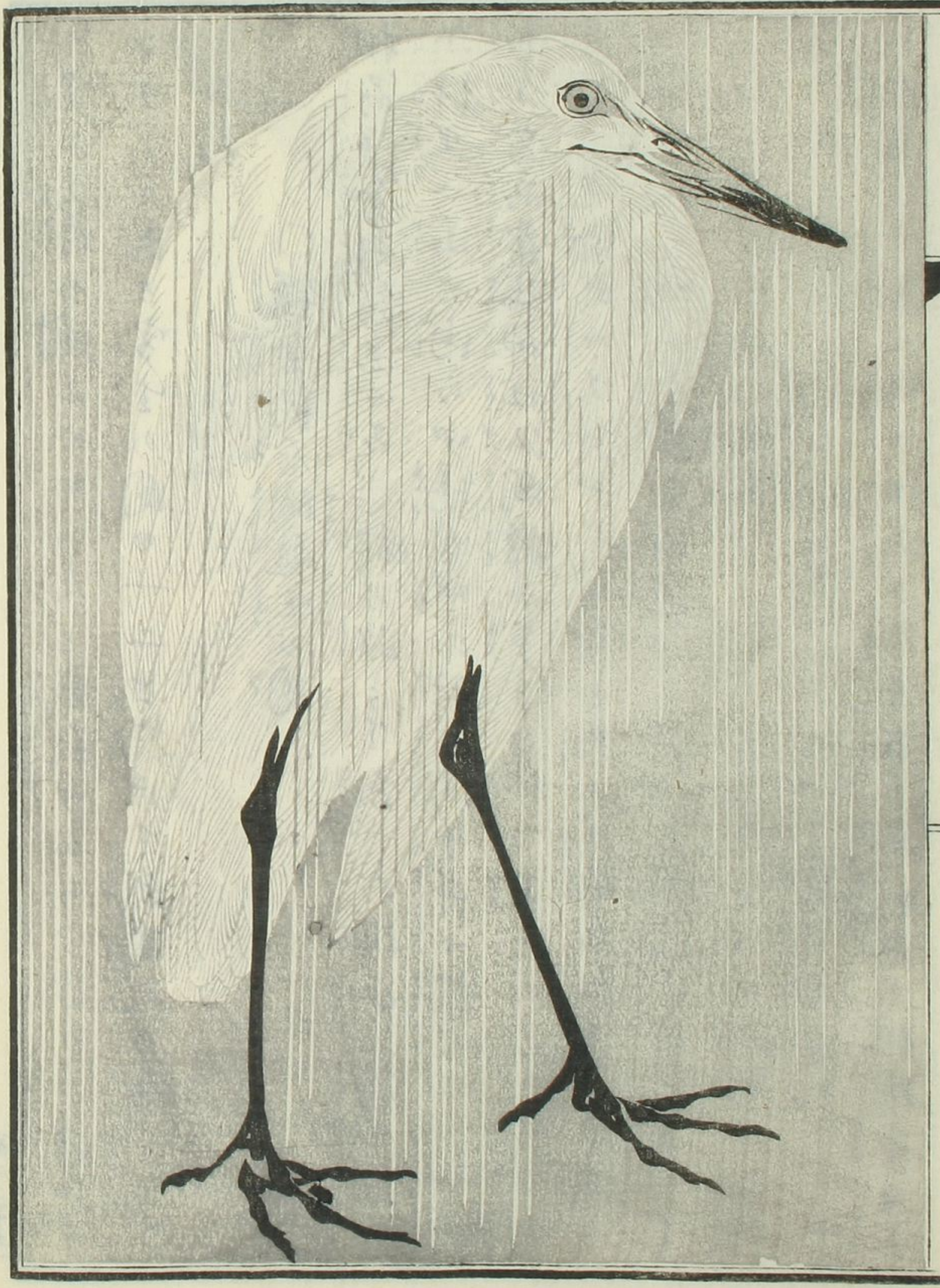
相扇鎌倉郡鎌倉の古き都の跡とて東に六浦西に編村南に
小坪北に山の内の甲境の中にお七郷十井十橋七の切通
あり名所舊跡神社仏閣持ふ多きを以て其日たりと宮生倣
さんと暁斎氏ハコンテール氏と共に赴き鶴ヶ岡の
八幡神社を始め建長寺圓覚寺の古式の様式ハ寶物等を宮
一採り遂に新居の間魔王小到りしハコンテール氏頼り小其
倣の異るる体と珍らしと賞するを以て是と宮生倣したれ
む今爰に十王の他の四王と出せあり 押新居の間魔王の十

英國人セーゴンダール氏
鯉又鷺の寫生の図



明治二十年五月
共進會小賞券
の印を賜ふに因
り爰に上げら

三十三鱗割出の図



同



外二ノ二十七

同

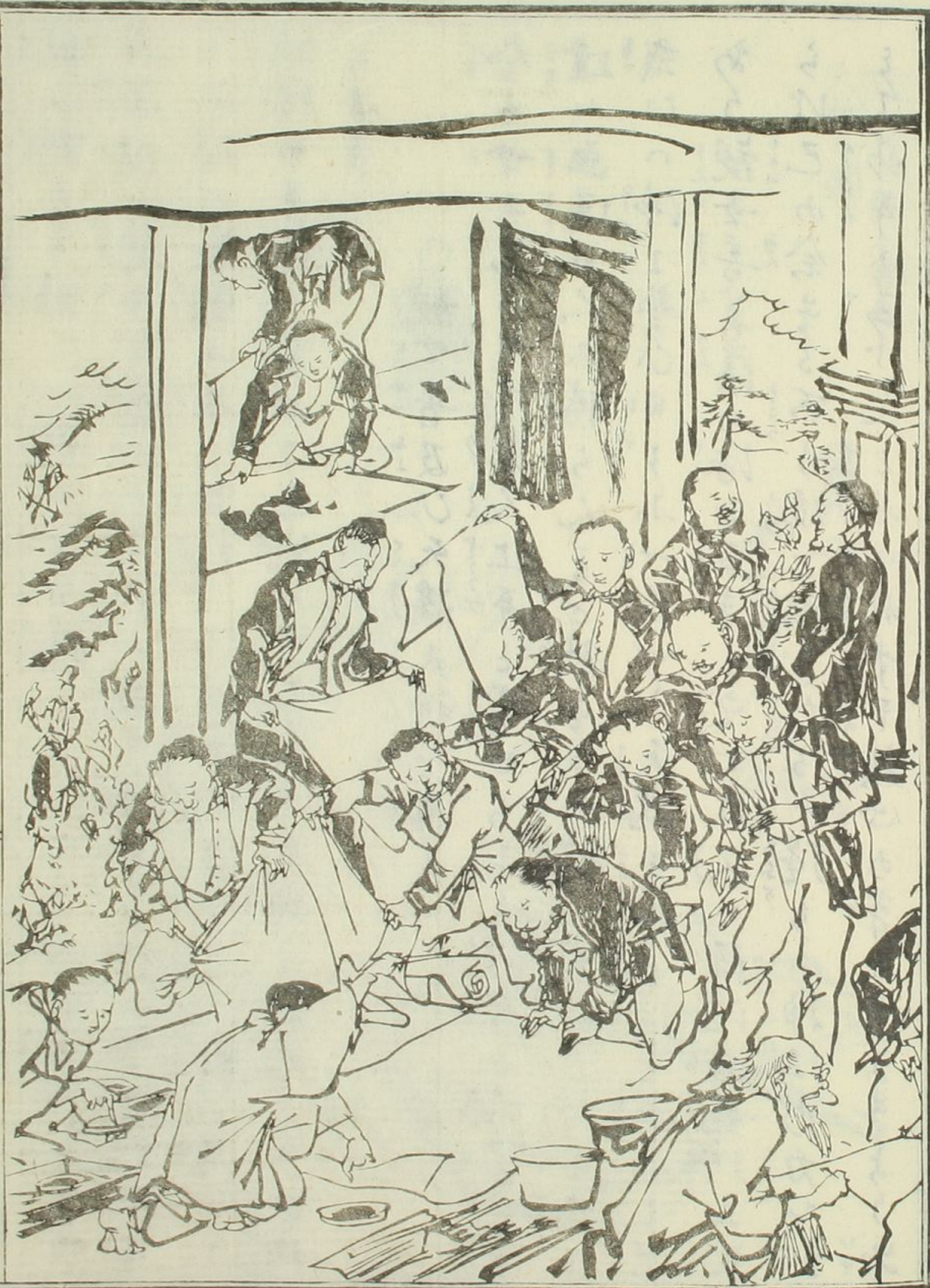


同

明治十七年甲午五月十日
於鎌倉新舟修之野地取

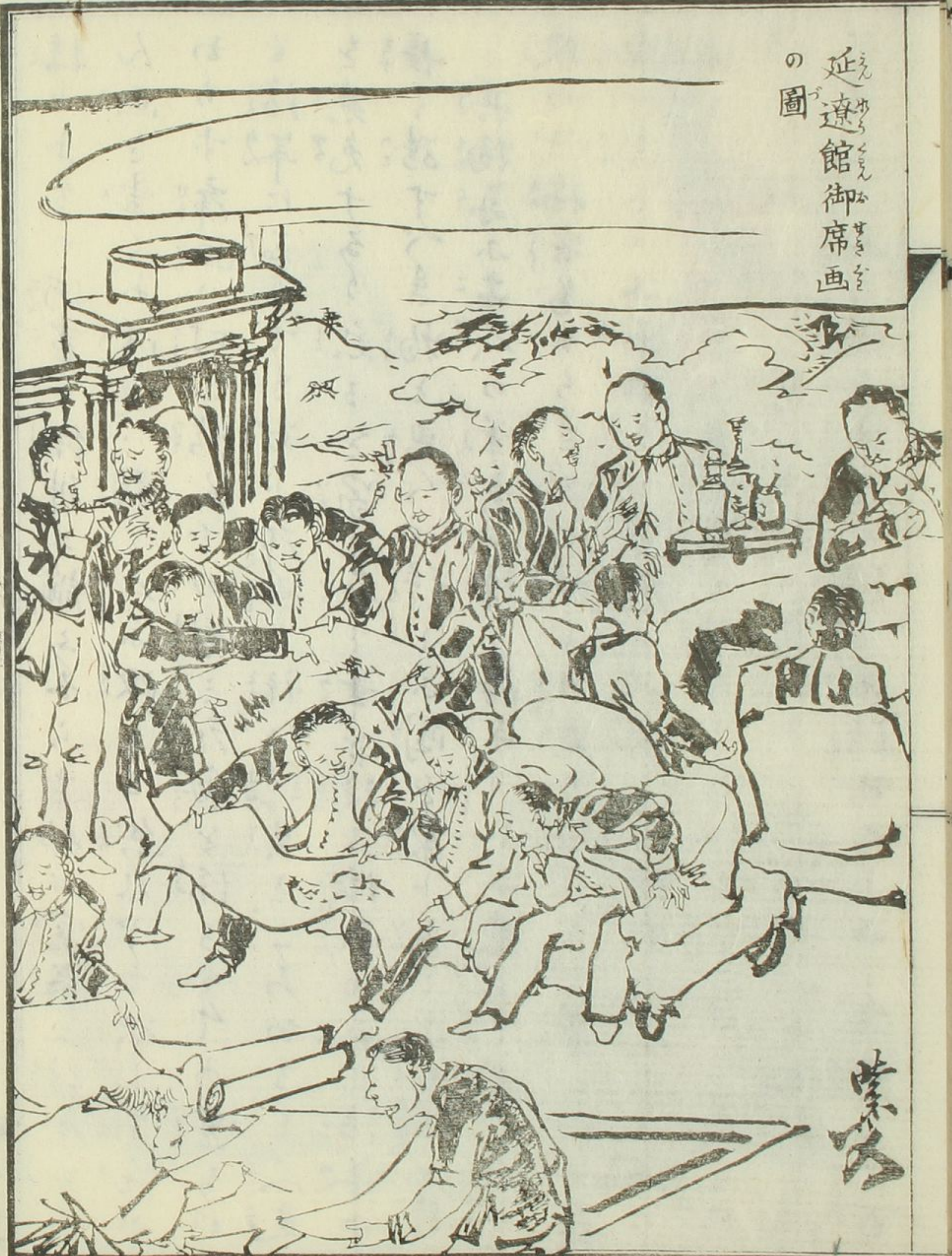


挿とさるの何事ぞ精神論ふならざれば富貴不設るあら
 ん画をまくの遅連の頼もろふ涙りと然れども決し左小
 あら小席画の時小臨んかの慰三彦舟と添るすやの業あれ
 を後年になりてもお小席画と移く過失とらあも人も是
 を見免すありを家を在て筆を採る依頼の画の後年小
 長く残すづき物と思ふバ種小園を粟ト色く小工物と凝
 其物毎ふ古人の筆意を挿り得手し小基きて画けむ一
 枚の仕揚容易あらさるが故小日夜のちちろく筆と取て寝
 食と忘るふ玉れども愛顧の法君より依頼と受たる物の
 遅延及ぶい実小氣の毒の限りと言べ一然も之をぬ
 何とも做し難し思ふ我が考付あし十年以来依頼と請
 了書たり画の残り追ふ溜り其坊地のこ小し既二百



外三十三

延遠館御席画
の圖



紫

枚不到きり固一一枚を七日揚りとして此は之のそま
 五年餘の同日と費やさざれば画き得るを能はず況んや日
 こ小陸の依頼小及一年殆ど六十小近きを以て數日こ小
 減往の急考く書とると能はざらんりと氏に歎息して物語
 らせり

○觀世音及び天満天神を画く

今の世小至るまで名人上手と賞せらるる法考の大家先生
 達の画道の人の勝らん王と歎まるの餘り或ひの神子祈り
 或ひの佛に誓ひ日こ小一枚づ天満天神の像を画きし若
 あり觀世音菩薩の像と画きし世あり又の孫陀不動何小回
 らば己の念する所の物と画きたるハ強ち小神仏の力を頼
 として妙手小五人と小い漸ずそ熱心のきり方ありより出

曉齋日課小書
 天神の像

月九年十二月廿五日
 如空曉齋
 如三



同日課小書も
観音の像

明治廿五年六月廿七日
如空堂主
印



外三十一

る信心ふして天神の像ふすれ観音も初め像ふすれ日こふ
 乃史と夏形神と異ふし筆意と精とて画くとまの自然と如
 所を写すの業ふして像を人の神社に敬め希ふ賽銭を投
 三拝合掌して境内を祈る類ひと同トウらんや爰於て暖高
 氏も深く古人の日課法を慕ふより先頃より一途ふ事
 とまどめ人より依頼を受けて昔画の間に幸ひあつても費
 難けれむとて或いは朝早く起或ひは夜通く寝て観音院
 の像を画き是を法華寺の観音法流と上野公園内法華
 の観音又西京智恩院の観音も同く十枚の納め又天満
 天神の像を画き本所電戸村天満宮越所平川天満宮湯島天
 満宮の三社一月五枚づつを納めて天満天神の尊像と観
 音菩薩の御影を永く世に傳へし後世の画道不遊者をして

外三十二



曉高ハ之程ハ小勉強出精シク丹書ノ業ハ困共為一たれども
 猶其画くとらろハ斯の如まり実ハ画の道ハ容易ありざる
 物と言事と知らせ後又一ツハ波の之ハと形体ハ夏ても
 天満宮ハ天満宮親世多ハ親世多の縁ある故アリ物を画く
 るレハ六十年ハ近き歎れども始め小筆たる筆方と後追
 小筆筆力と待方ありむわり或ハ同ハありと試んと
 成ルハ氏ハ始め画道ハ熱心ありハ汎ク諸流の筆力を学ばる
 由あり今白をいへ地より其流とらると見れば画術の
 妙変を極めんが為ハ古画を集むると以テ樂むものあり
 んりと一人言き

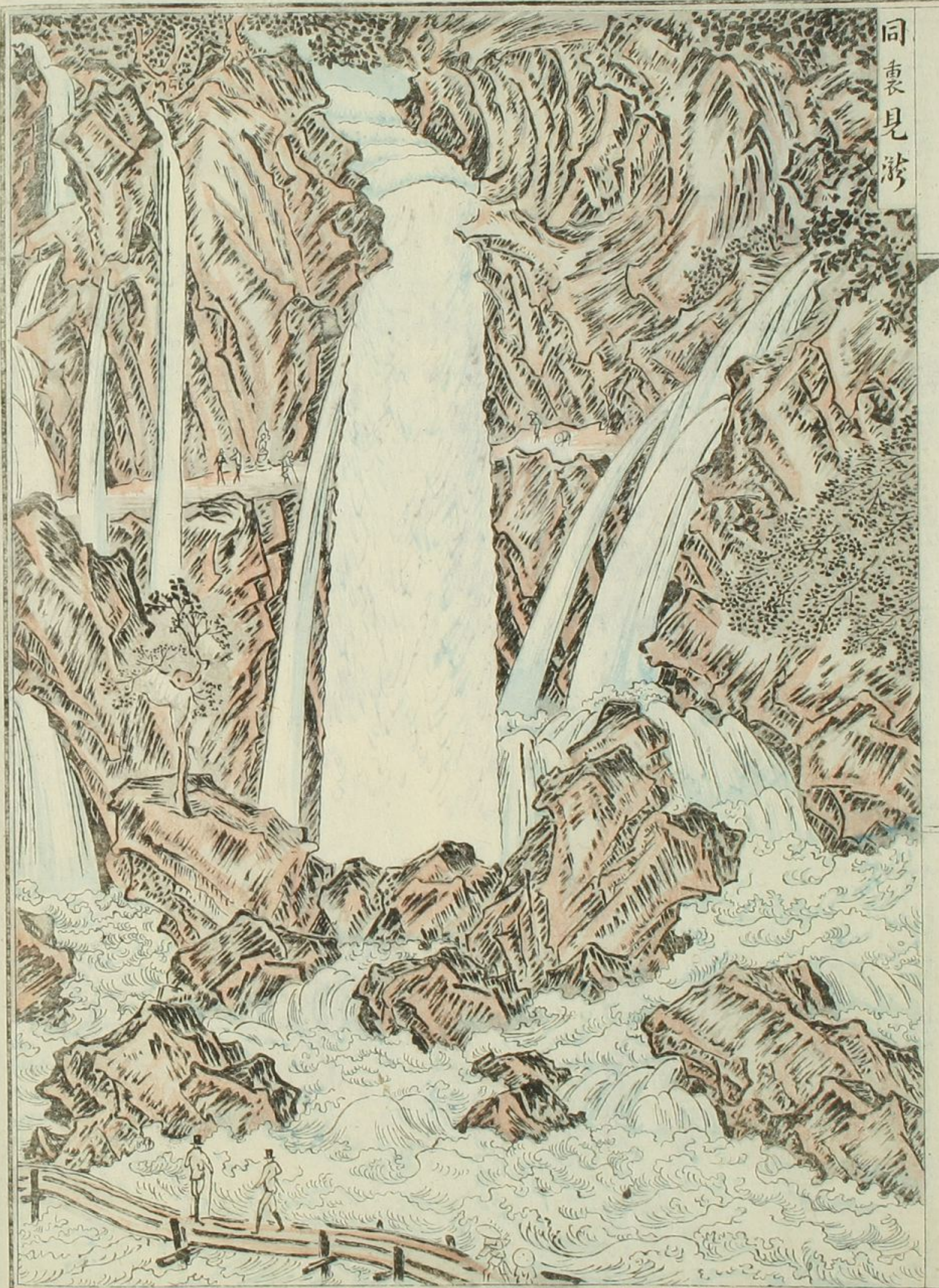
○二荒山ハ瀑布を看る

下野國ニ荒山ハ河内郡ハ小寺ヲ稱徳帝ハ神漢景雲元年苗



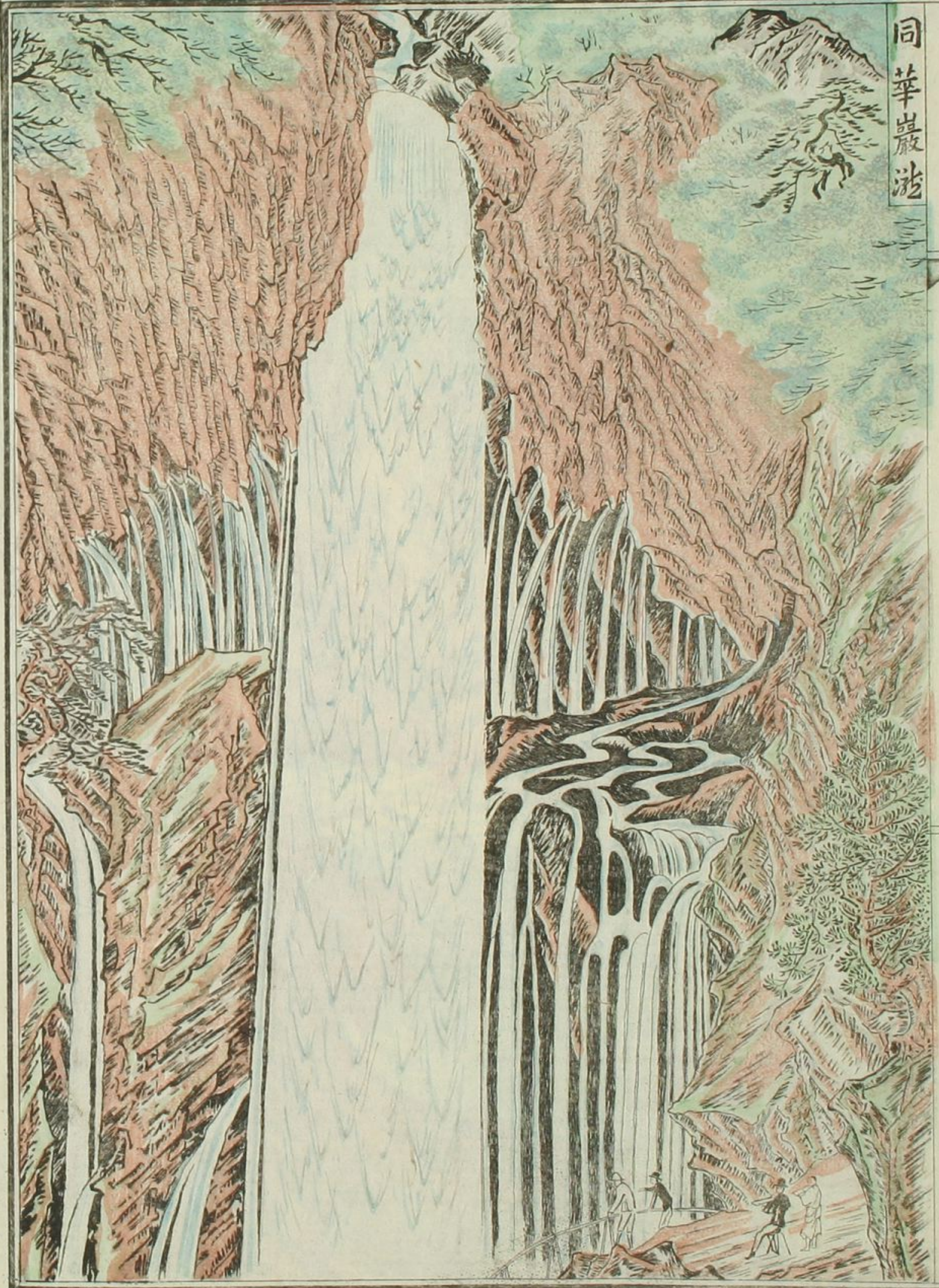
同
含満淵

時元
生
時



同
裏見
跨

同華巖遊



芳賀郡の人勝区上人ぬめて此山を宗人と企て跋渉せん
 とぬしたれとも路險しく雪深くくを昇ると純つ山嶺小
 して止り居ると三七日を經て還りしが此年ついに漸頂を達
 せしや言ふ衆峯四面小深り時ち其間小大湖小湖群へて四
 十八湖あり奇花異木草木人境小氷ざるが如し特小東照神
 君の尊冥を當山の麓小祭祀てより瀟山の莊嚴その美言語
 小絶を佛堂七室と銘め階砌様干小多るやで美堂一善堂に
 め結構ある故人送程の遠きを厭はずして此社小詣むる
 者多し多し木末よりハ三十六里と距りたれども今ハ上野
 山下より下野宇津宮まで二十四里を濠車あて走らすまの
 一日小一々二荒へ達するあり爰小於て曉高式ハ門下の英
 人ゼノコンデール氏と共に二荒山小到り東照公及び

三氏將軍家光公の灵廟（あまのつみ）も在る壁天井も画きたる（かき）有名の物
 を多くコンデール氏と共に一覽して後又中禪寺も登り湖
 水の風景を寫し又戰場原の廣漠たる様古々岩村湯中の餘
 などを餘さず寫し取し夫より又湯滝般若の瀧寶幢の瀧と
 所有滝を寫し就中七十五丈を直下為ると云華嚴の瀧又寂光
 の飛泉の高サ二丈許り小くは瀧の三小不動明王の像立り
 景絶景あり重見の瀧ハ二荒山の坤の方一里守むかりの西
 小して奇異の灵窟あり山に登り山を下りて岩の洞小入る
 其窟屋の高サ丈餘濶さ二丈むかりは処より瀧の如小出
 て瀧の裏を見らるり飛瀑の高サ濶さ何れも二丈むかり
 上小石傳の不動明王あり霧障の瀑布ハ二荒山の良三里む
 かり小なり瀧の水三段と成て落ち其との段ハ松栢蔭と一

て入り下の段ハ深谷の下宮り々葦研の如し三雲の飛泉岩
 小當つて散乱一宛然霧雨の如し因て霧障の名有り味飛泉
 小を氏ハコンデール氏と共に小日と費やし村を移し々字を
 為し来りしりどる夷々之と出せ小道あり移り僅小此四ツ
 の飛泉を掲げて瀑布の水勢を後學の人小示さんと為るの
 氏ハ老澗心まれば初心の人ハ能く筆さ小注さあらハ益を
 得るを多からんり

曉齋畫談外編卷之二畢

明治二十年六月廿八日出版版權御願
同 年七月六日版權御許可

小石川區小石川指ヶ谷町七拾三番地士族

編輯者

瓜生政和

本郷區湯島四丁目廿二番地平民

画工人

曉齋

河鍋洞郁

淺草區聖天横町二拾六番地平民

出版人

岩本俊

大坂心齋橋	松村九兵衛
全南久室寺町	前川善兵衛
全本町四丁目	岡島真七
西京	藤井孫兵衛
尾州名古屋町	片野東四郎
全	川瀨代助
美濃岐阜	三浦源助
加州金澤	近岡屋太平
越中富山	守川吉兵衛
信州長野	西澤喜太郎
全 上田	伊藤甲造
全 松本	高見甚左工門
越後長岡	佐藤作平

越後長岡	目黒十郎
全 三條	樋口小左工門
陸前仙台	伊勢屋安右工門
羽前山形	五十嵐太右工門
渡島函館	鮎文堂
甲州山梨	内藤傳右工門
駿州静岡	廣瀬市兵衛
書 上州高崎	煥乎堂
野州宇都宮	萬年屋忠兵衛
上総東金	能勢多左工門
武州横濱	吉川伊兵衛
全 鴻ノ巣	長島為一郎
東京	島屋稻垣武八

東 京 書 肆

北畠茂兵衛
大倉孫兵衛
須原鉄二
稲田佐兵衛
丸屋善七
小林鉄次郎
吉川半七
有隣堂
岸田吟香
博聞社
山中兵衛
同孝之助
牧野吉兵衛

東 京 書 肆

柳川梅次郎
原亮三郎
文學舎
石川治兵衛
小林喜右門
辻岡文助
出雲寺万次郎
北澤伊八
松崎半造
吉田久兵衛
別所平七
榊原友吉
高崎脩助

